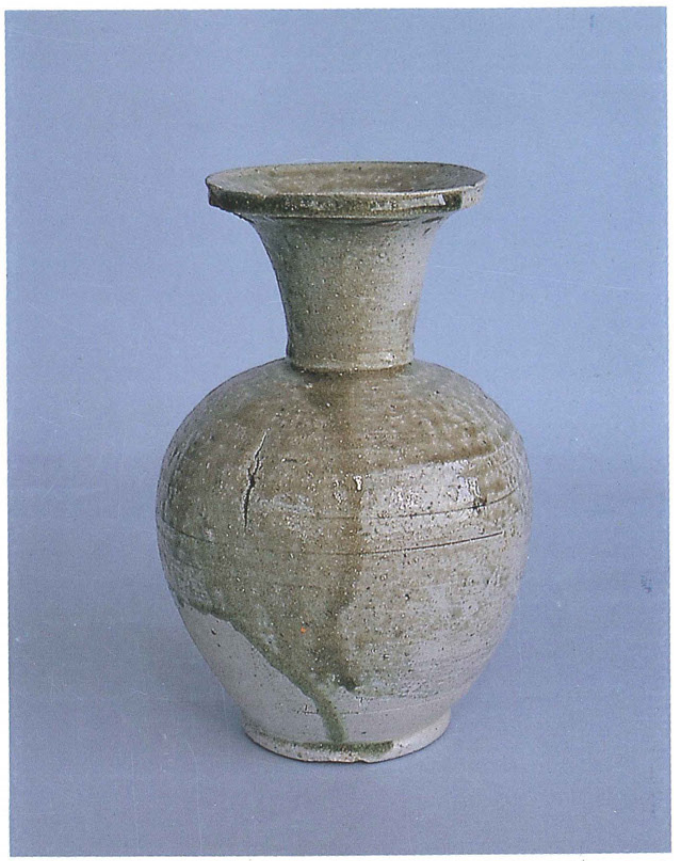
飯山市埋蔵文化財調査報告　第25集

小佐原遺跡・関沢遺跡
KOZAWARA　SEKIZAWA



小佐原遺跡　灰釉（かいゆう）　長頸瓶（ちょうけいへい）（平安時代）

1991・6

長野県飯山市教育委員会

飯山市埋蔵文化財調査報告　第25集

小佐原遺跡・関沢遺跡

KOZAWARA　SEKIZAWA

1991・6

長野県飯山市教育委員会

序

飯山市教育委員会
教育長　岩 﨑 彌

飯山市は長野県の北部に位置し、山紫水明で優れた自然環境に恵まれています。また、古く輝かしい歴史をもち、その歴史の背景のなかで育まれてきた数多くの文化財も残されています。これら美しい自然も価値の高い文化財も、ひとしく私達飯山市民の祖先が残してくれた貴重な遺産であります。これら貴重な遺産を知ることは、ふるさとを知ることであり、ふるさと飯山のたぐいなき良さを知ることでもあります。また、そうした先人の歴史を学ぶことは、過去をみつめなおし未来を考えるための礎になるものです。

一方で、祖先が残してくれた貴重な文化財が破壊され、失われることは誠に残念なことであります。これらを大切に保存して後世に伝えることは、現代に生きる私達の責務でもあります。

小佐原・関沢遺跡は古くからその存在が知られており、それぞれ学会においても注目されている遺跡であります。このたび遺跡地内に建物建設が計画されることになり、市教育委員会では記録保存のための緊急発掘調査を実施しました。調査団長の高橋桂先生をはじめ、調査員各位、作業員の方々など多くの市民の皆さんの御協力を得まして実施し、初期の目的を達成することができました。

本報告書が広く市民の皆様方に読まれ、私達祖先の生活を偲ぶとともに、地域の将来を考える資料として活用されることを念願いたします。

平成３年６月

例　　言

1　本書は、長野県飯山市大字小佐原字西小佐原8,833-1番地に所在する小佐原遺跡、および飯山市大字瑞穂字畦高4,173-1番地に所在する関沢遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2　発掘調査は以下の原因により行った。

小佐原遺跡　　農村総合モデル事業　農村環境改善センター建設

関沢遺跡　　新農村地域定住促進対策事業　民芸関係施設建設

3　調査は、飯山市（農林課所管）の依頼により、小佐原遺跡は平成２年９月４日より同８日まで、関沢遺跡は平成２年９月11日～10月５日まで発掘調査を行い、整理作業は平成３年２月に行った。

4　調査にかかる組織・参加者名簿等はそれぞれの遺跡の報告の中に掲載した。

5　本書に収録した遺跡の概要は以下の通りである。

小佐原遺跡　　平安時代　　木棺墓１基　　灰釉陶器長頸瓶（ちょうけいへい）・小瓶（しょうへい）・黒色土器坏

関沢遺跡　　旧石器時代　時期不承土坑ほか　　剝片・くぼみ石

6　本書で使用した方位は、磁北である。

7　本書の編集は、小佐原遺跡を望月静雄、関沢遺跡は常盤井智行が行い、全体を高橋桂が統括した。

目　　次

序

例　言

第１編　小佐原遺跡

第１章　遺跡の地理と環境……望月静雄…… 11

1　地理的環境 …… 11

2　歴史的環境 …… 12

第２章　小佐原遺跡の調査と歴史 …… 14

1　遺跡の発見と過去の調査 …… 14

2　調査に致る経過 …… 19

第３章　調査の成果 …… 21

1　調査の方法と経過 …… 21

2　遺構 …… 23

3　遺物 …… 24

A　木棺墓出土遺物　B　遺構外出土遺物 …… 24

第４章　結　語 ……高橋　桂…… 29

第２編　関沢遺跡の調査

第１章　調査経過 ……常盤井智行…… 33

1　調査に至る経過 …… 33

2　調査と整理 …… 33

A　発掘調査 …… 33

B　整理作業と報告書の作成 …… 34

C　調査日誌抄 …… 34

第２章　遺跡の位置と環境 …… 36
1　地理的環境 …… 36
2　歴史的環境 …… 36
第３章　遺跡の概要 …… 40
1　遺跡の概要と過去の調査 …… 40
2　調査方法 …… 40
第４章　遺構 …… 46
A　掘立柱建物 …… 46
B　柵 …… 46
C　溝 …… 46
D　土坑 …… 46
第５章　遺物 …… 48
A　旧石器 …… 48
B　くぼみ石 …… 48
C　その他 …… 48
第６章　結　語 ……望月静雄…… 49

図　目　次

小佐原遺跡

図１　遺跡の位置 …… 9
図２　周辺遺跡分布図 …… 13
図３　遺跡の範囲 …… 15
図４　昭和46年出土遺物１ …… 16
図５　昭和46年出土遺物２ …… 17
図６　昭和46年出土遺物３ …… 18
図７　調査区全体図 …… 22
図８　木棺墓（SKI）実測図 …… 23
図９　出土遺物 …… 25
図10　SKI出土鉄釘 …… 26
図11　鉄釘及び木棺想定図 …… 27
図12　出土石製品 …… 27

関沢遺跡

図１　遺跡の位置 …… 37
図２　周辺遺跡分布図 …… 38
図３　調査地周辺の地形 …… 41
図４　調査地全体図 …… 42
図５　関沢遺跡1980年出土旧石器(1) …… 43
図６　関沢遺跡1980年出土旧石器(2) …… 44
図７　関沢遺跡1980年出土旧石器(3) …… 45

図８　第１トレンチ全体図 …… 47
図９　出土遺物 …… 48

PLEAT目　次

小佐原遺跡
ＰＬ１　小佐原遺跡航空写真 …… 53
ＰＬ２　調査区近景　調査状況 …… 54
ＰＬ３　調査風景　調査風景 …… 55
ＰＬ４　木棺墓確認状況　調査状況 …… 56
ＰＬ５　木棺墓調査状況　遺物出土状態 …… 57
ＰＬ６　木棺墓遺物出土状態　遺物出土状態 …… 58
ＰＬ７　木棺墓出土遺物 …… 59
ＰＬ８　木棺墓出土遺物 …… 60
ＰＬ９　木棺墓覆土・遺構外出土遺物　遺構外出土石製品 …… 61
関沢遺跡
ＰＬ10　遺跡より千曲川・常盤平(西)を望む …… 63
関沢丘陵全景 …… 63
ＰＬ11　第１トレンチ全景 …… 64
第１トレンチ主要部 …… 64
ＰＬ12　第１トレンチ調査風景 …… 65
ＳＤ２・ＳＡ１・ＳＢ１ …… 65
ＳＤ２とＳＫ１の切り合い関係 …… 65
ＰＬ13　ＳＫ２ …… 66
ＳＢ１ …… 66
ＳＢ２ …… 66
ＰＬ14　第２トレンチ西部 …… 67
第２トレンチ南部調査風景 …… 67
第２トレンチ南部 …… 67
ＰＬ15　出土遺物　旧石器・くぼみ石 …… 68
出土遺物　礫・弥生土器・陶磁器 …… 68

第 1 編

小佐原遺跡

第１章　遺跡の地理と環境

１　地理的環境

小佐原遺跡は、長野県飯山市大字小佐原6833-1番地ほかに所在する。旧行政区画では、下水内郡柳原村小佐原であり、昭和29年の合併により飯山市となっている。

千曲川が、信濃に残す最後の平が飯山盆地である。盆地底の標高が約320ｍを計り、東西に6km、南北に16kmの規模をもち、紡錘形を呈している。盆地は千曲川によって東西に二分され、河東地区は木島平と呼ばれている。河西地区は、飯山有尾から常盤戸狩地区に向かって走る長峰丘陵によってさらに東西に二分され、東側はかつての千曲川氾濫源の常盤平、西は広井川が形成した外様平が広がる。外様平は東の標高

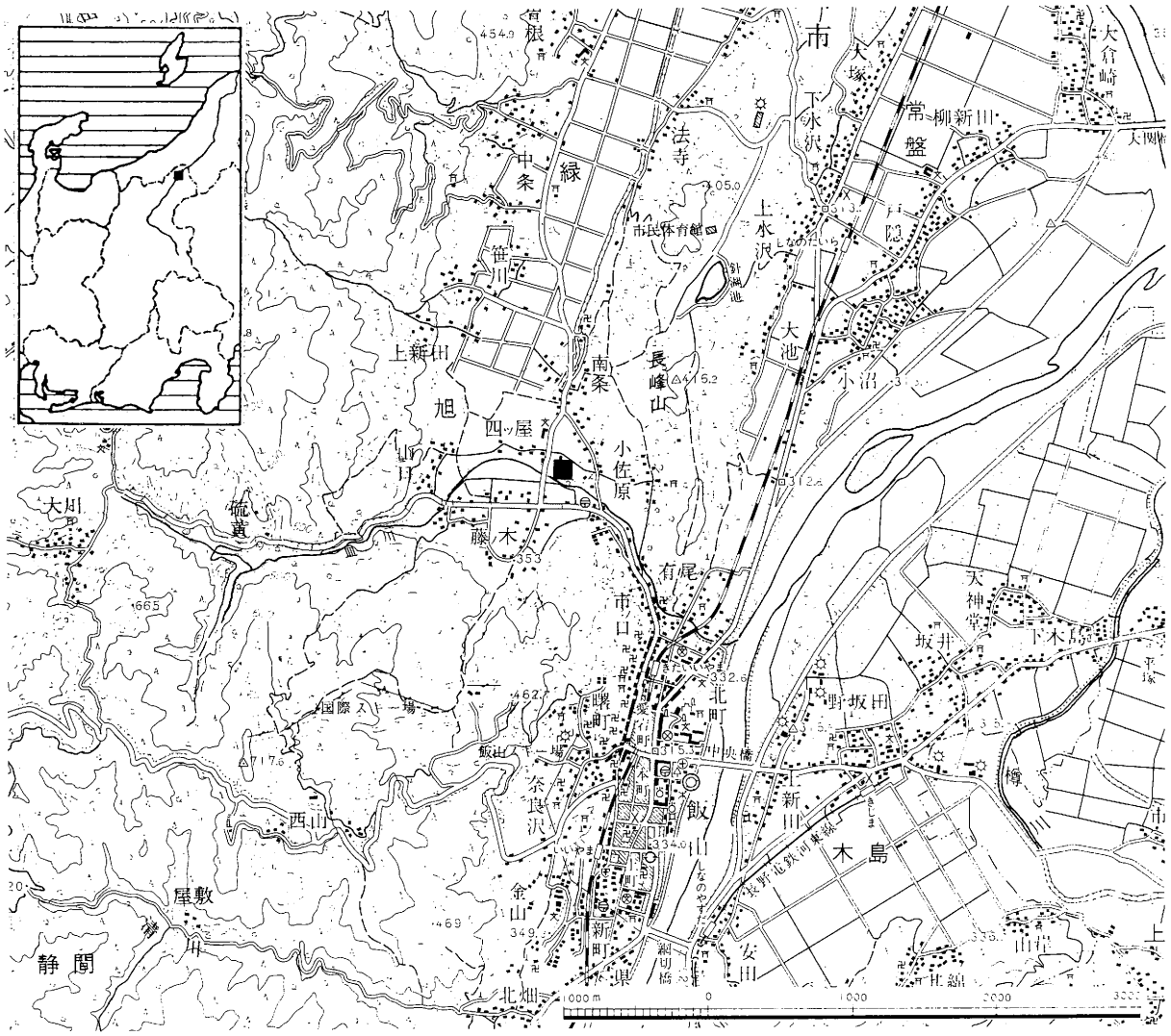


図１　遺跡の位置（１：50,000）

416ｍを最高とする低丘陵の長峰丘陵と、西の信越国境を分かつ1000ｍ内外の関田山脈によって画されており、東西1.5km、南北に8kmの狭長な低地である。飯山市合併以前は、この外様平は南から柳原村、外様村、太田村が包括されていた。

さて、この外様平を仔細に観察すると、関田山系から流出する河川によって形成された扇状地と、谷状地ならびに低湿地が入り組み、さらに長峰丘陵と同成因によるとみられる小丘陵が点在している。

遺跡の所在する柳原小佐原地区は、長峰丘陵とそのかつての支脈とみられる鬼が峰と呼称される小丘およびその間の低地とにまたがっている。さらに西側は柳原地区の穀倉地帯である広い凹地帯、南側は皿川によって形成された扇状地とその氾濫源が存在している。

遺跡は鬼が峰丘陵全体に広がるが、特に濃密な分布を示しているのはその南半で、皿川によって崖下をさらわれ急崖となっている南・西側に偏している。今回調査した地区は、鬼が峰丘陵の西側斜面で飯山市旭連絡所が存在している地点である。遺跡の南150ｍ、皿川の低地をはさんだ須多峰丘陵には、県下初の方形周溝墓が発見された須多ケ峰遺跡が存在する。また、西側には県道藤ノ木・曽根線が走り、付近には飯山市柳原保育園がある。

当地区は、夏は高温多湿の内陸型の気候であるが、冬は日本有数の豪雪地帯で裏日本型気候を示す。外様平は関田山脈から吹き下ろす北風は激しく、飯山市内東側の瑞穂・常盤地区に比較し多雪地帯となっている。

2　歴史的環境

長峰丘陵南半および外様平の遺跡

当地区における考古学的調査が行われた遺跡について下記に掲げよう。

(遺跡名)	(番号)	(調査年)	(所在地)	(発掘主体者)	(担当者)
有尾	(3)	昭和27年11月	飯山有尾3560	田中修一	神田五六
		昭和35年11月	飯山有尾3527	前沢広光	
		昭和36年８月	同　上		桐原健
		昭和62年７月		飯山市教育委員会	高橋桂
黄金石上	(4)	昭和38年８月	飯山黄金石上653	飯山南高校校長山田匡次	神田五六
須多ヶ峰	(9)	昭和40年７月	飯山須多ヶ峰7375	飯山南高校　高橋桂	高橋桂
		昭和40年12月	同　上		
		昭和45年９月	飯山須多ヶ峰7334の3	飯山市教育委員会	高橋桂
別府原	(22)	昭和43年９月	旭別府原	高橋桂	高橋桂
城ヶ鼻	(10)	昭和44年４月	小佐原6858	高橋桂	高橋桂
小佐原	(10)	昭和44年６月	小佐原6798	永峯光一	永峯光一
北原	(14)	昭和53年４月	旭北原5369	飯山市教育委員会	高橋桂
		昭和55年11月		飯山市教育委員会	高橋桂
		昭和58年10月	旭北原5366	飯山市教育委員会	高橋桂
		昭和59年７月		飯山市教育委員会	高橋桂
鍛冶田	(13)	昭和54年５月	旭鍛冶田	飯山市教育委員会	高橋桂
北町	(2)	昭和58年９月	飯山2610	飯山市教育委員会	高橋桂
		昭和63年８月		飯山市教育委員会	望月静雄
		平成２年７月		飯山市教育委員会	高橋桂

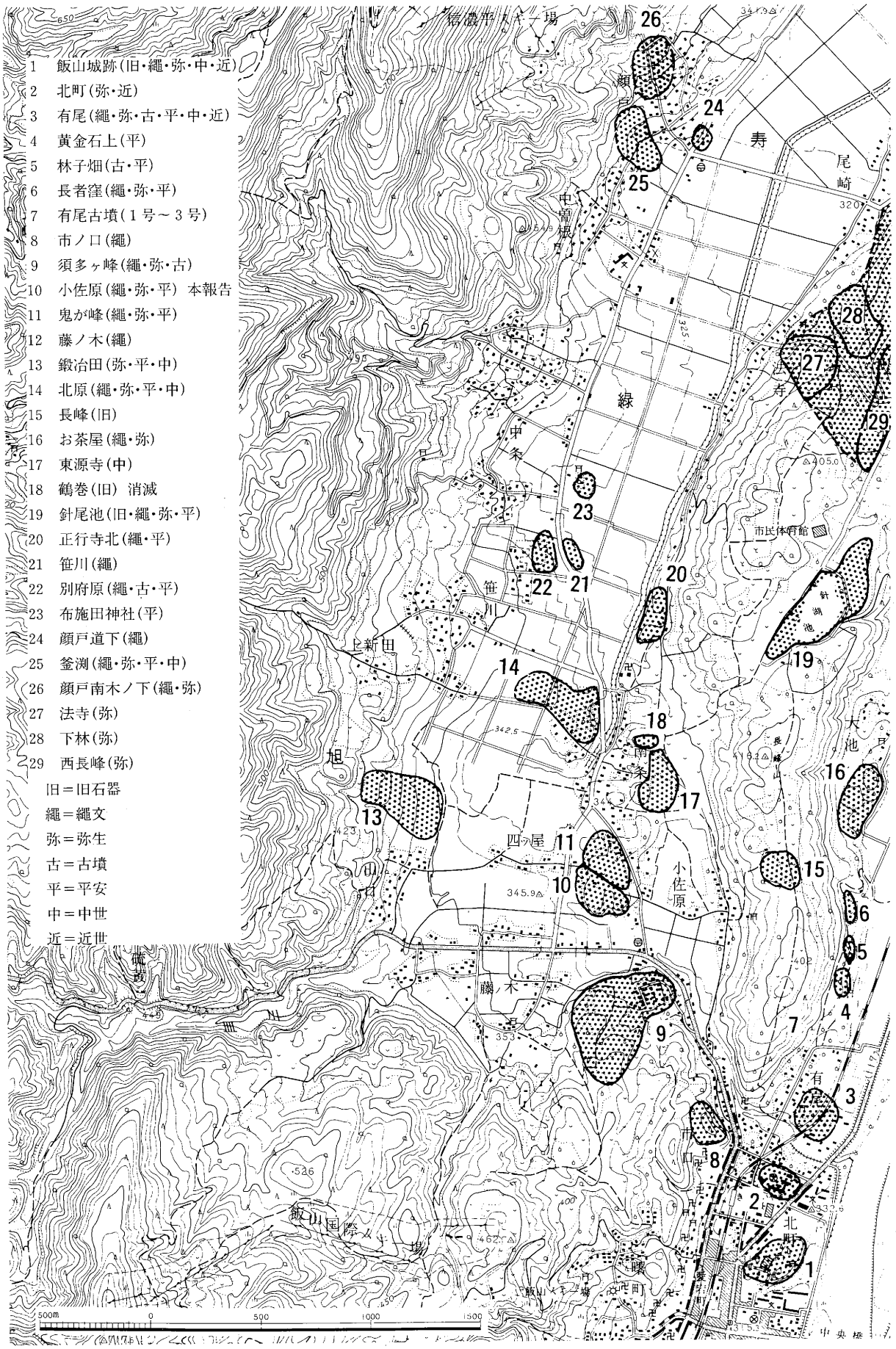


図2　周辺遺跡分布図（1：25,000）

釜渕　　(25)　昭和62年５月　寿江下　　飯山市教育委員会　　高橋桂

古くから北沢量平氏・栗岩英治氏らによって調査が進められ、戦後、神田五六・森山茂・桐原健・高橋桂の各氏らによって精力的に調査が進められた。縄文時代前期有尾式土器の標式遺跡ともなっている有尾遺跡（３）や、弥生時代の尾崎遺跡は一時型式名として学史に登場している。また、四十年代に入ると開発工事に伴う緊急発掘調査が行われるようになった。県営住宅団地造成に伴う須多ヶ峰遺跡の調査は、県下初の方形周溝墓が発見され、鉄釧や大型の勾玉が発見された（高橋　1966・1967）。さらに、一部が埋め立てられ、保護措置がとられたことも開発工事に伴う遺跡保護運動の成果として記憶に新しい。五十年代には、低湿地における圃場整備が実施されるに及んで、従来不明であった外様平の遺跡が姿を現わすようになった。北原遺跡（14）は、こうした大規模開発に伴う発掘の端緒となった遺跡で、約二千平米の調査によって平安時代の鍛冶遺構が集中して発見された。さらに翌54年の鍛冶田遺跡（13）の発掘調査では、平安時代の墓域とともに弥生時代の遺構・遺物が発見され、従来弥生時代遺跡として長峰丘陵のみに目を奪われていたのが、外様平一帯に弥生文化が花開いていたことを証明することとなった。なお、昭和62年には釜渕遺跡（25）の調査で、中世集落と推定される遺構や木簡・漆椀・鳥形などの木製品等が発見され、当地方に存在したとされる『常岩の牧』を具体的に追及できる資料もしだいに出揃いつつある。

以上、発掘調査を通して長峰丘陵南半・外様南半を概観してみると、第一波の開拓は弥生時代に急速に進められ、須多ヶ峰にみられる首長級の墓が造られるほど統一されていったのではないかと考えられる。つづいて第二波は、平安時代に律令制下のもとに開拓が進み、北原・鍛冶田・鬼ヶ峰（11）・正行寺北(20)・別府原（22）・布施田神社（23）・釜渕（25）など各地で平安集落が形成され、やがて常岩の牧が造営されたと推定される。当地域はその南側の中心地帯であったと考えられる。

第２章　小佐原遺跡の調査と歴史

１　遺跡の発見と過去の調査

小佐原遺跡は、鬼が峰丘陵の全体に及んでいる。遺跡は、信濃史料第一巻下地名表に『城端遺跡』として登録され、縄文中期初頭型式出土地として記載されている。また、飯山北高校地歴部ＯＢ会の分布調査報告では『城ヶ端』とされている（飯山北高地歴部ＯＢ会　1977）。その後、城端もしくは城ヶ端遺跡として呼称していたが、昭和44年６月に行った回転縄文系土器群の発掘調査をまとめた広瀬は、弥生時代遺跡として既に報告された城端遺跡との混同を避けるために所在する地区および地字名の小佐原を使用することとし、初めて『小佐原遺跡』として報告した（広瀬　1981）。しかし、時代的な分布が明らかに異にしているわけでもなく、縄文草創期の回転縄文系土器群出土地と弥生時代遺物出土地点が近接していることから、広瀬の報告以来、城端遺跡名を抹消し、一帯を小佐原遺跡として統一することにした（飯山市教委　1986）。県史番号では54、飯山市遺跡番号は109である。

鬼が峰丘陵は、そのほぼ中央に旧飯山町から富倉峠を越えて越後へ抜ける旧道が東西に走っている。この道路を境として北側は平安時代を中心とした遺物の分布がみられ、南側は縄文時代、弥生時代の遺物分布が確認されている。そのため、道路北側を鬼が峰遺跡とし、南側を小佐原遺跡として分離している（飯山市教委　1986）。なお、全国遺跡分布地図では、鬼が峰遺跡の所在地が西方の四ツ屋地区入り口付近にドットで示されているが、これは誤記である。

小佐原遺跡の発掘調査は、過去二回行われている。いずれも昭和44年に実施されたもので、畑作物転換の耕起による事前の緊急発掘調査であった。

図３　遺跡の範囲（1:2,500）　１、昭和46年調査（弥生時代調査地点）　２、昭和46年調査（回転縄文系土器群調査地点）　３、平成２年調査地点

弥生時代調査地点（図３・１）

昭和44年４月、高橋桂によって調査が行われた（高橋　1967）。地主の渡辺猛氏による畑作転換に伴う深耕で多量に出土した地点を調査し、弥生時代の竪穴住居址１軒を検出した（図４）。渡辺氏の採集した壺（図４－１）をはじめ住居内より壺・甕・高坏・鉢・クルミの炭化物などが出土している（図４－２～７）。土器から弥生時代後期の箱清水式土器に位置付けられるものである。

回転縄文系土器群調査地点（図３・２）

昭和44年６月、永峯光一氏によって調査が行われた（広瀬　1981）。ごく限られた小範囲であったが、約1500点の回転縄文系土器群が発見された。報告した広瀬は、土器は表裏両面に回転縄文が施文される第一類、器表面のみに回転縄文が施文される第二類、無文の第三類に三分類している。施文により若干の時期差が認められるようであるが、器面表裏あるいは器表面に回転縄文が施文された一群の土器群として一括し、草創期後半の一様相を示す貴重な資料として報告されている。

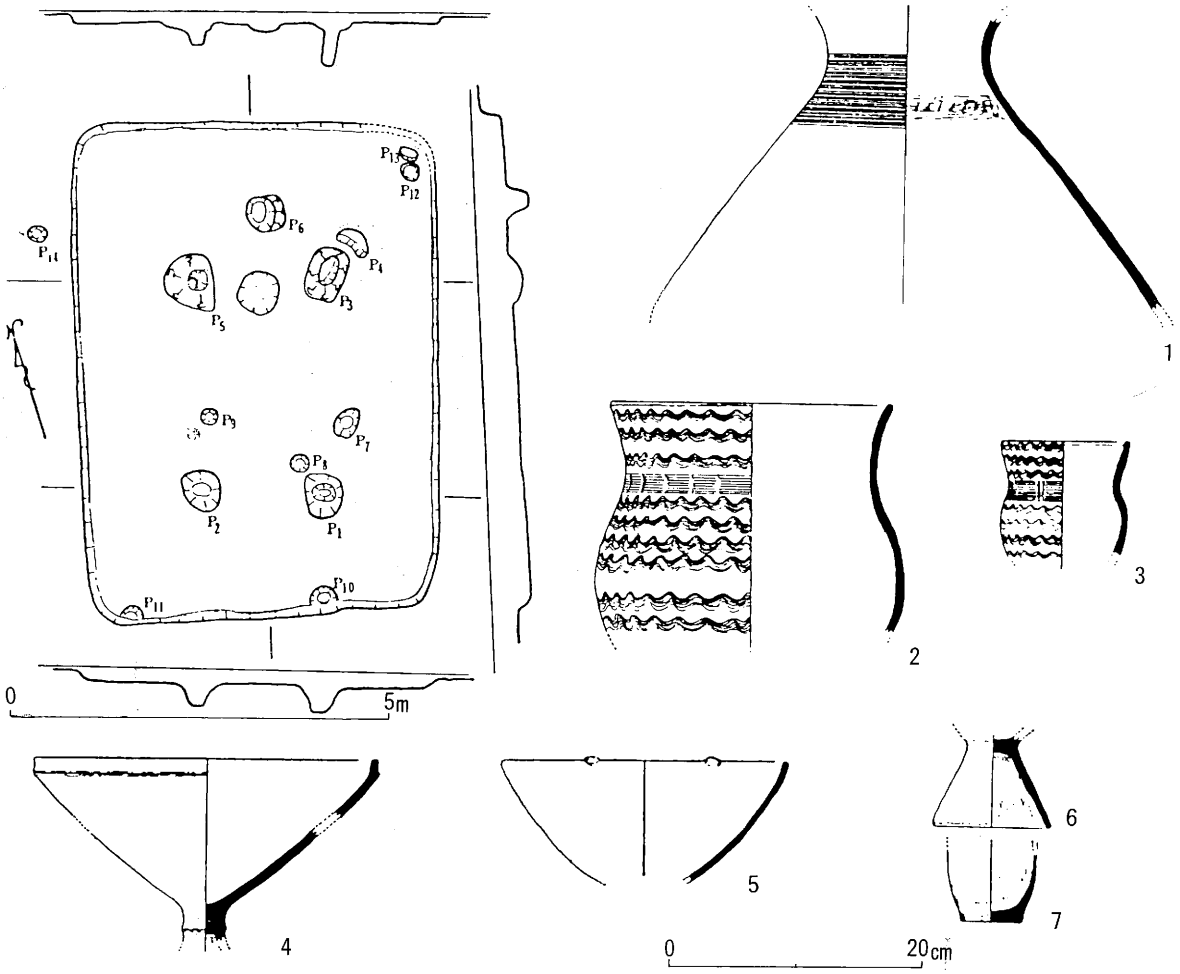


図４　昭和46年調査出土資料１（弥生時代調査地点）（高橋）・(1967)

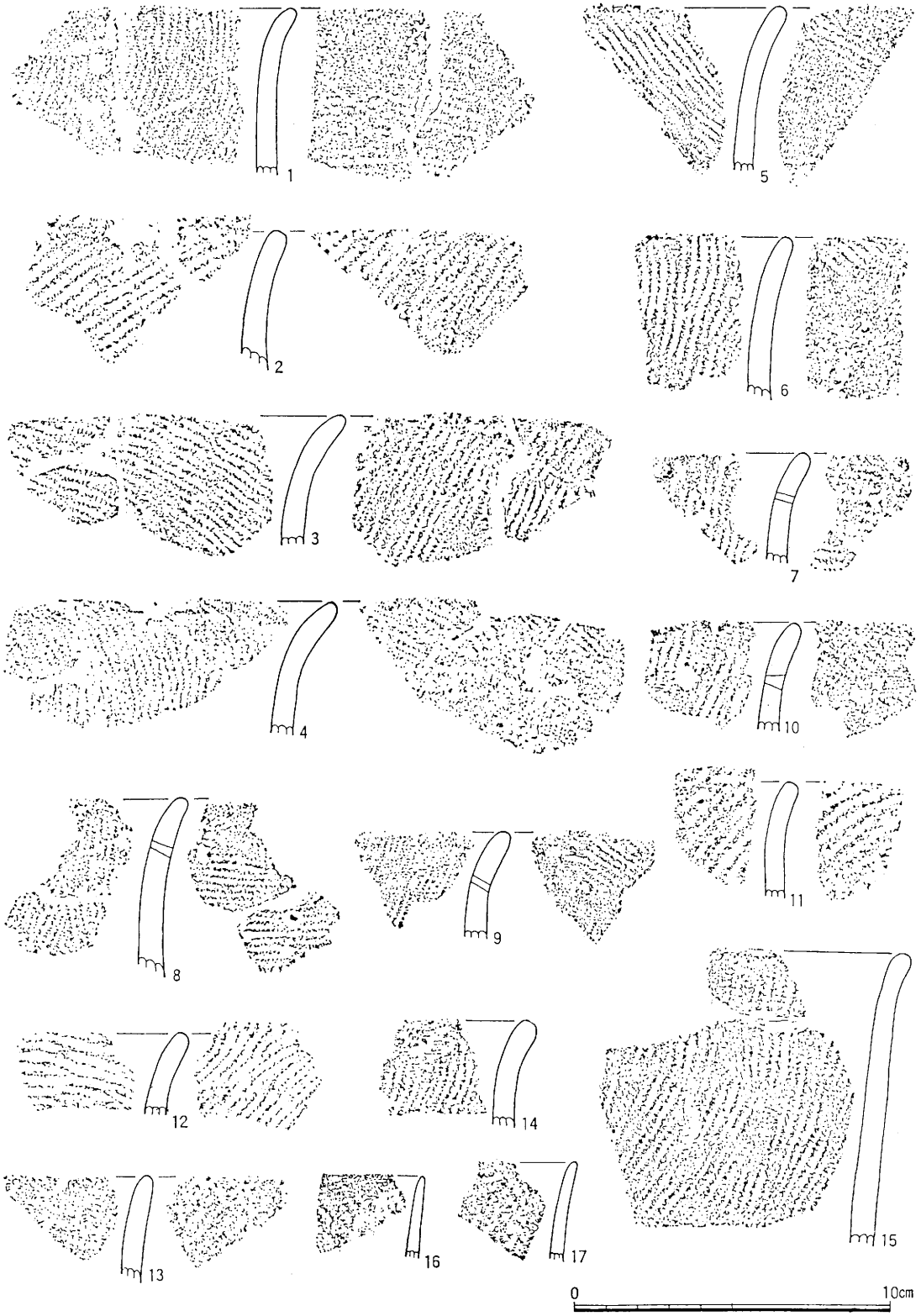


図５　昭和46年調査出土資料２（回転縄文系土器群出土地点）（広瀬 1981）

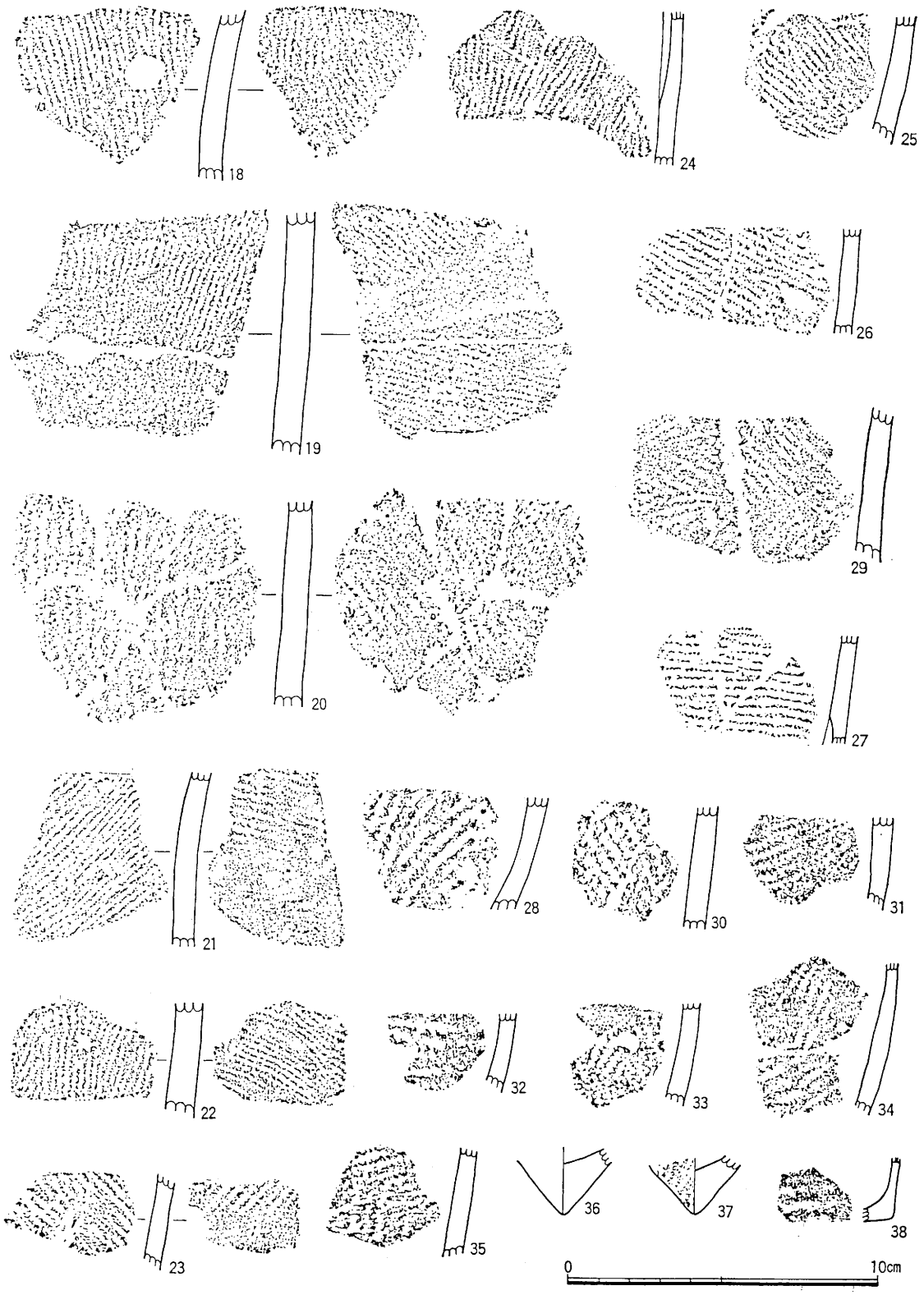


図６　昭和46年調査出土資料３（回転縄文系土器群出土地点）（広瀬　1981）

2　調査に至る経過

昭和27年、柳原村役場として新築された現在の飯山市旭連絡所は、老朽化が進み改築の計画が以前よりもち上がっていた。当初の計画では、地区として柳原小学校の跡地に移転改築を希望としていたようであるが、種々の事情により現在地に位置の決定をみた。この場所は、小佐原遺跡の西端部にあたり、おそらく昭和27年の役場新築時によるものと思われるが、斜面を大きく削平して平坦になっていた。したがって遺跡分布図では遺跡の範囲内として設定してはいたが、大部分が破壊され消滅していると考えていた。

計画を策定した市役所担当部局の農林課は、平成元年10月に教育委員会に遺跡の照会を行った。たまたま他の現地協議で指導をお願いしてあった県文化課の小林秀夫指導主事に現地協議をお願いすることとし、10月21日、農林課担当の青木係長、山田主査、清水主事および教委渡辺係長、市文化財保護審議会委員の高橋桂氏、および望月で協議を行った。その結果、高橋・小林両氏とも大半が破壊されているが、遺物が若干採集できることから、一部残存している可能性もあり、事前の調査を行う必要があるとされた。12月４日付けで県教育委員会教育長より、現地協議の結果について通知があった。内容は、「事前に発掘調査を実施して、記録保存を図る。発掘調査に伴う経費は事業主体者である飯山市が負担する。発掘調査は飯山市教育委員会に委託する。」というものであり、計画書並びに予算書が示された。

飯山市長名で文化財保護法第57条の３第１項による通知が教育委員会に提出され、12月12日付けで県教育委員会教育長宛提出した。このことに対する通知は12月28日付けで事前に発掘調査を実施するよう改めて通知があった。

平成２年６月22日、文化財保護法第98条の２第１項による埋蔵文化財発掘通知を文化庁長官宛提出した。調査体制は飯山市遺跡調査会で行い、調査の実際は調査団（高橋桂団長）が実施することとした。なお、国営農地開発関係遺跡および小泉遺跡群の発掘調査が進行中であり、調査団全員が２か所に分散して担当していたために、そうした調査の合間を縫って行わざるえなかった。

調査体制は以下のとおりである。

飯山市遺跡調査会（平成２年度）

顧　　問	小野沢静夫	市長（平成２年９月14日退任）
	小山　邦武	市長（平成２年９月15日就任）
会　　長	佐藤　春夫	市教育委員会委員長
副 会 長	長谷川元一	市社会教育委員長
委　　員	吉沢菊之進	市文化財保護審議会会長（平成２年10月26日退任）
	滝沢藤三郎	市文化財保護審議会会長（平成２年11月２日就任）
	藤沢賢一郎	市議会総務文教委員長（平成２年12月11日退任）
	丸山　豊雄	市議会総務文教委員長（平成２年12月12日就任）
	中村　　敏	市公民館長
	高橋　　桂	日本考古学協会会員
	山崎美都枝	市教育委員会委員長職務代理
	浦野　昌夫	市教育委員会教育長（平成２年12月24日退任）
	岩崎　　彌	市教育委員会教育長（平成２年12月26日就任）
事務局長	佐藤　　清	市教育委員会教育次長
事務局次長	渡辺　　博	市教育委員会社会教育係長
事務局員	堀内　隆夫	市教育委員会社会教育主事

事務局員　望月　静雄　飯山市教育委員会社会教育係
樋山二二子

調査団

団　　長　高橋　　桂　飯山北高等学校教諭
担　　当　望月　静雄
調 査 員　常盤井智行
田村　滉城
小林　新治
丸山　三二
常田　利夫

調査参加者（順不同・敬称略）

吉谷すみ（藤ノ木）・岸田昇・北川サワ（山口）・宮本みち（四ツ屋）・小林勇・渡辺チサ・高橋幸枝・渡辺なを（小佐原）・荻原なつ・清水はる（南条）・小島有・堀川定夫・大塚富蔵・高柳定夫（笹川）・北川利之・中島伝一・荒井則夫・荒井博美（上新田）・宮本正人（重機オペレーター）

調査協力者（順不同・敬称略）

前沢節朗（柳原地区区長会長）・清水一洋（柳原地区区長会副会長）・前沢弘平（柳原地区老人会長）・丸山昭治（飯山市公民館柳原分館長）・荻原克己（柳原地区老人会副会長・南部）・藤沢澄夫（飯山市旭連絡所・公民館柳原分館主事）

第３章　調査の成果

１　調査の方法と経過

調査方法(図７)

調査は、120 ㎡を対象面積とする緊急発掘であったが、工事実施対象地区（約1200㎡）の大半が既調査に削平されているものと考えられ、それらの状況を確認することを目的とした。そのため、調査方法はトレンチ法とし、工事用に設置された畑境杭２点をそのまま発掘区のポイントとして幅２ｍのトレンチを設けた(Ａトレンチ)。さらにＡトレンチ途中より直交するトレンチを設けた（Ｂトレンチ）。また、丘陵端部の状況を確認するために任意にトレンチを１本設定した（Ｃトレンチ）。なお、調査中新たに削平部の確認のためにＡトレンチの北側をミニ・バックホーで確認調査を行った(Ｄトレンチ)。調査区呼称は、４ｍ毎に分割し番号を付した。遺物等の取り上げは、たとえばＡトレンチの１番はＡ－１とし、遺物の略名ＫＳＨをその前に付した。調査については、市内２箇所で発掘調査を実施していたため、作業員の確保をはじめすべて柳原地区の区長会（会長前沢節朗氏）ならびに地区老人会（会長前沢弘平氏）にお願いして進めた。そのほか器材収納・休憩場所等については旭連絡所にお世話になった。

経　過

発掘調査は、平成２年９月４日から７日までの４日間の予定で実施した。Ａトレンチの４・５から調査を進めたが、地山面の褐色風化火山灰層まで約30㎝で、すべて地均し工事により移動した土層であった。Ｂトレンチの１・２は耕作土（黒色土）がわずか15㎝で、黄色褐色土も大きく削り取られていた。また、Ｃトレンチは西・南側で200㎝以上黒色土や黄褐色土の互層となっており、斜面を削りとった土を埋め立てた場所と判明した。４・５両日の調査で、Ａ～Ｃトレンチすべての調査を終了した。また、Ａトレンチの北側をバックホーにより確認したが（Ｄトレンチ）、大きく削平されており遺物も皆無であった。

６日になり、Ｂトレンチ４以降では黄褐色土がほとんど削土されていないことから、西側一帯に遺構が残されている可能性があると考え、新たに拡張することとした（図７拡張区）。しかし、調査の結果は、多くが破壊を受けて攪乱されており、近・現代の陶磁器類が出土した。

７日の最終日午後３時を過ぎて、拡張区東隅より小竪穴状の落ち込みを検出した。周囲の状況・覆土の色調から新しいものと思われ、また他に遺構がないことから本日中に終了さる予定のためスコップで掘り下げを行った。調査途中２か所でまとまって釘が出土した。かなり大型であったため近世以降の墓であると思われた。３時50分過ぎ、最後に残った遺構覆土の西側部分を掘り下げたところ灰釉陶器小瓶が出土しさらに長頸類も続いて発見された。精査したところさらに黒色土器坏も４点出土した。このことによって平安時代の土壙墓（木棺墓）であることを確認し、翌日細部実測を行うこととした。８日、他の遺跡調査が休みであったため、高橋団長に指導をいただき、常盤井・小林・常田・丸山の各調査員に依頼して、実測ならびに写真撮影を行った。正午にはすべての作業を終了させることができた。

以上わずか4.5日の発掘調査であったが、７日の雨の日も作業員の方に出席していただくなど日程的に大変厳しいなかで、調査面積 337 ㎡を調査し、共献品をもつ平安時代土壙墓（木棺墓）１基を検出することができた。ただし、遺存状況がきわめて良好であったにもかかわらず精緻な調査を行う事ができなかったのは、偏に担当者の責任に帰すものである。

整理作業は、平成３年２月に行った。本書の作成に当たっては、土器実測・製図を桃井伊都子が、鉄釘実測・製図は常盤井智行が、写真は田村況城・常盤井・望月静雄が行った。

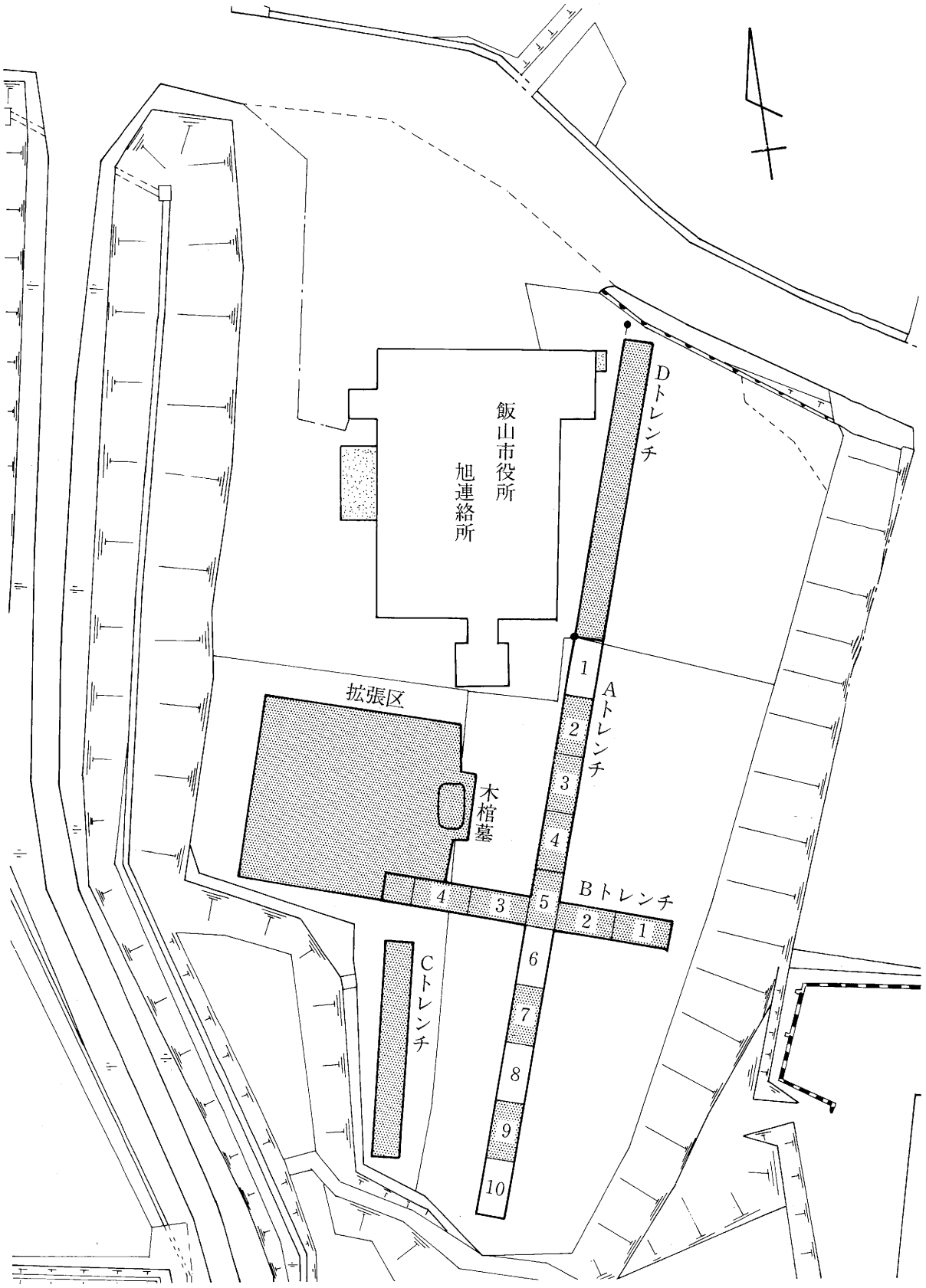


図７　調査区全体図（1:400）

2　遺　構

調査前の予測通り、大半の地区が既に削土されており、遺構は大半が消滅していた。カッティングした土を西側低地へ押し出したために、拡張区のみ一部残存していた。しかし、この地区も近・現代の構築物があったと推定され、そうした痕跡や遺物が多く認められた。検出された平安時代の木棺墓は、こうした状況のなかで唯一残された遺構であると考えられる。

木棺墓（図８）

長さ295 cm、幅155 cmの大型で、四隅がやや丸みをもつ長方形を呈する。確認面からの深さは50cmを計る。主軸の方位はN17°Eである。急斜に掘り込んでおり、特に東側はほぼ垂直となる。覆土は褐色土が混じる暗黒褐色土層で、層位の識別は確認しえなかった。遺物は覆土中にも多くの土師器破片が出土しているが、長軸の西側部分において、ほぼ中央から北側にかけて完形の灰釉陶器長頸瓶１、同小瓶１、黒色土器坏４が並置されて出土した。厳密には、それぞれ壙底より0.5～１cm浮いた状態で出土しているが、ほぼ底面に接している状態といえる。１点の坏は伏せた状態で出土しているが、他はすべて正位に置かれている。４点のうち各２点が口縁を接するように置かれており、２点ずつセットの可能性もある。また、出土位置について実測出来なかったが、壙底に近い覆土中より鉄釘18点が、長軸の両端部より約40～50cm内側においてほぼ直線的に出土した。おそらく、木棺に使用された釘と考えられる。

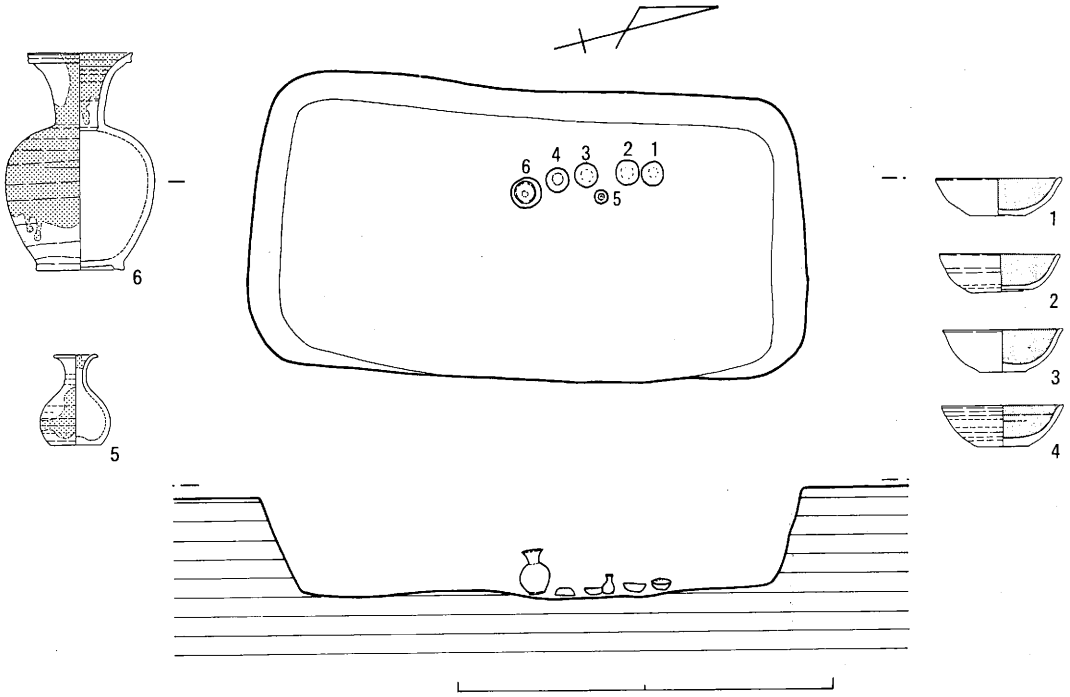


図８　木棺墓（ＳＫ１）実測図（１:40）（遺物は1:８）

3　遺　物

A　木棺墓出土遺物(図９・１～15，図10)

（１）供献遺物　壙底に埋納された６点の土器・陶器である(１～６)。

黒色土器　坏（１～４）

１は、口径12.8cm、器高４.５cm、底径５.０cmを計る。口縁端部がやや外反し体部が内湾ぎみとなる形態を呈し、やや歪みがある。底部にはロクロ糸切り痕をとどめている。内面は口縁部分に丁寧なミガキがなされる。色調は褐色を呈し、胎土には小石等が混じっている。２は、口径13.0cm、器高4.4cm、底径5.3cmを計る。１同様に口縁端部がやや外反し体部が内湾ぎみとなる器形を呈すが、色調は乳褐色を呈し、胎土は精選され、調整も１より入念に行われている。外面底部には糸切り痕をとどめる。３は、口径13.3cm、器高4.0cm、底径5.7cmをはかり、１・２より器高が低く、底径が大きい。ややあげ底状の底部で、内湾ぎみに立ち上がる。色調は褐色を呈し、胎土調整方法は１と同様である。４は、口径12.7cm、器高4.3cm、底径6.0cmをはかり、形態・胎土等は３と類似する。器表面はロクロ痕を明瞭に残す。

以上の黒色土器坏は、法量・形態は１・２が類似し、３と４が類似する２グループがあり、また、胎土・色調は２のみが異質で、１・３・４が類似する。

灰釉陶器

小瓶（５）

口径4.8cm、器高9.5cm、底径５.４cmを計る。頸部からゆるやかに外反し、口唇部でラッパ状に開いており胴部は球胴形を呈して底部に至る。体部はロクロナデ調整が丁寧に施され、底部外面には回転糸切り痕を残存させている。灰釉は、頸部内面と外面口唇部から胴下半にかけて、刷毛塗りによって施されているが胴上半から口唇部にかけて剝落している部分が多い。東濃産光ヶ丘１号窯式期で、前川編年（前川1986）では９世紀後半から10世紀初期に位置付けられる。

長頸瓶（６）

口径11.1cm、器高23.1cm、底径９.０cmを計る。頸部接合部からゆるやかに外反してラッパ状に開いており、口縁部は下方に挽き出して口縁帯を作っている。胴部は、なだらかにほぼ胴中央部で最大径となり、ゆるやかにすぼまって底部となる。頸部から口縁部はロクロナデ調整が施され、胴部は下半まで回転ヘラ削り調整が行われる。底部は回転ヘラ削り調整がなされ、糸切り痕が消されている。施釉は、内面頸部上面から口唇部、外面は口縁部より胴中央部よりやや下まで刷毛塗りで施される。光が丘１号窯式期に位置付けられよう。

（２）覆土一括土器（７～15）

土壙墓の覆土より土師器破片が多く出土している。このうち図化したのは、黒色土器坏５（７～11）・椀１（14）、土師器坏３（11～13）である。このほか黒色土器に墨書の認められるもの１点（15）がある。

黒色土器椀（14）は、脚部が押しつぶれたように変形している。外面底部は回転ヘラケズリののち、ナデ調整が施される。土師器坏は、いずれも底部とのそ周辺のみで全体の器形は不明であるが、外面底部には回転糸切り痕をとどめている。

（３）鉄釘（図10）

土壙墓の特定部分２か所よりまとまって出土したもので、木棺に打ちつけたものと思われる。調査時の不手際により地点分布図を作成しなかったために、どちらから何点出土しているのか不明であるが、総点数18であることから恐らく９点ずつの出土と推定される。また、２か所以外から全く出土しなかったのかどうか断定はできない。

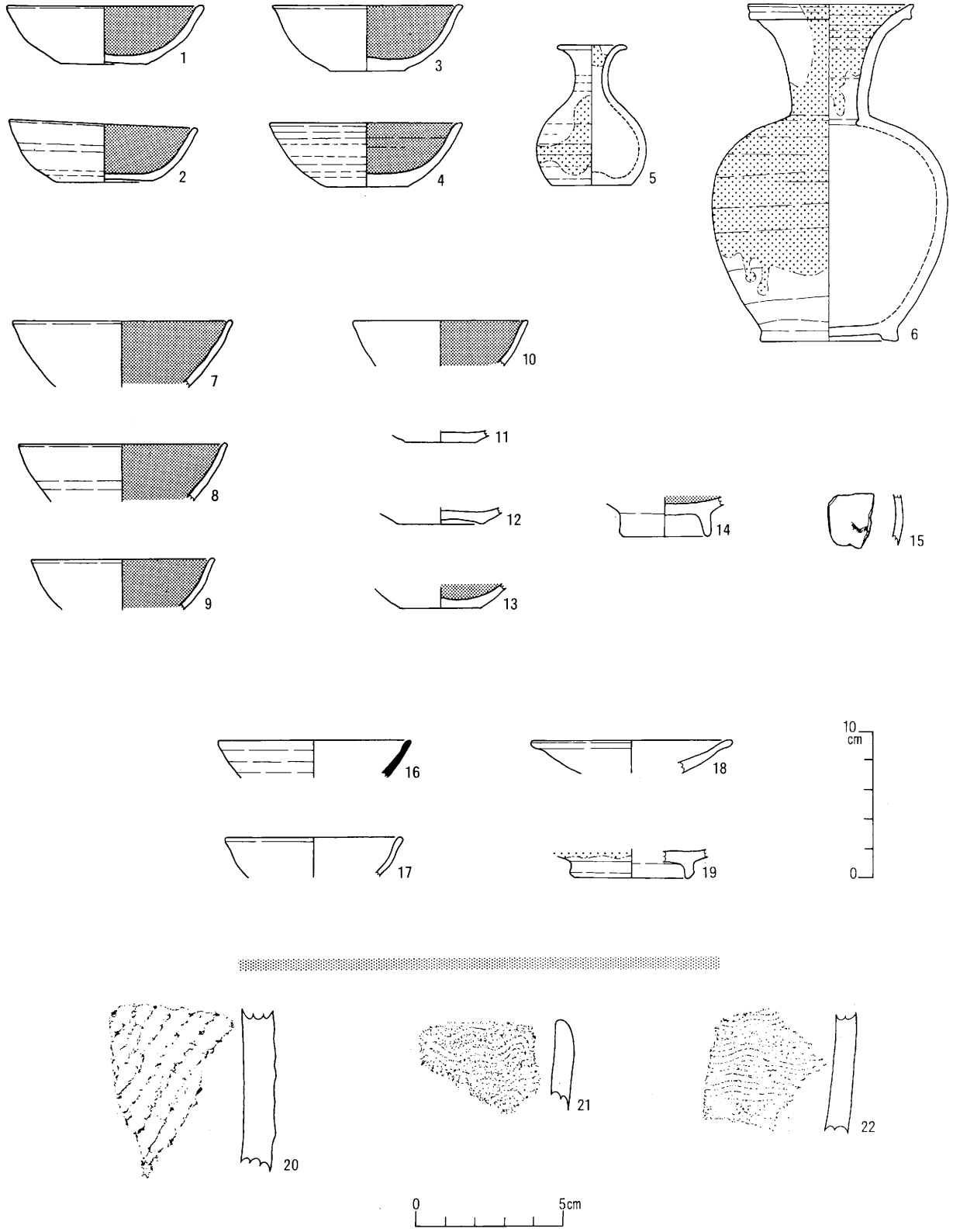


図９　出土遺物(１～15 SK1・16～22 遺構外) (1:4・1:2)

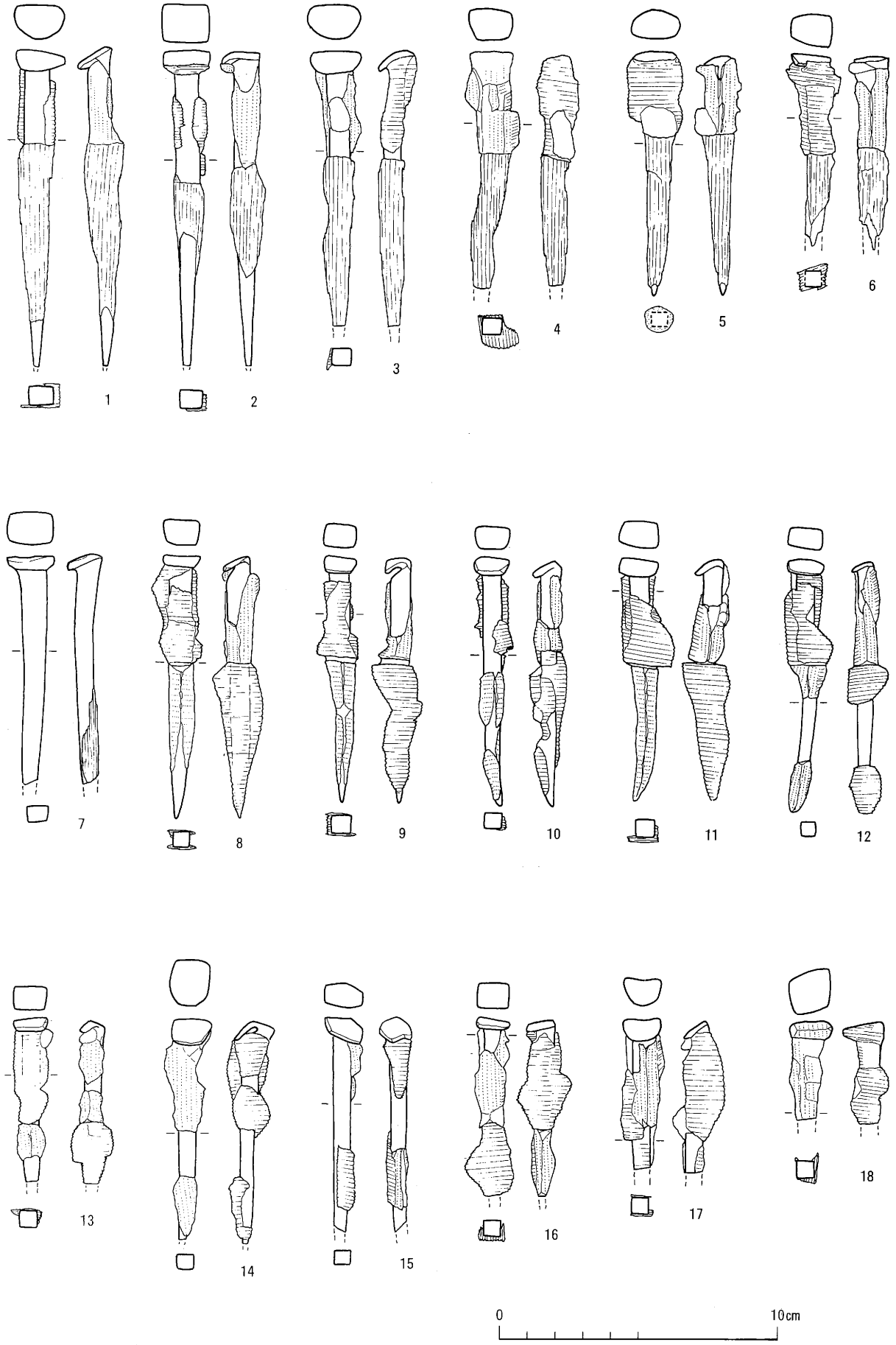


図10　SK1出土鉄釘（1:2）

長さは8.6～11.5cmで、8.5～9㎜のものが多い。10cm以上のものは1～3の3点のみである。径はおよそ7㎜の角釘である。頭部は、上から叩いて長方形状の平坦な面を作っている。

錆に木質部の木目が痕跡として残っており、板の厚さを知る手掛かりとなっている。重ねた上の板の厚さは、釘上部の木質痕の幅と一致するからである。5の一例のみ3cmであるが、他は3.5～4cmの範囲に収まり、板の厚さは約4cm弱であったと推定される。また、木質痕から木棺の形態・板材の組み合わせも想定されるが、各釘の出土位置を記録しなかったため、明確にすることができない。

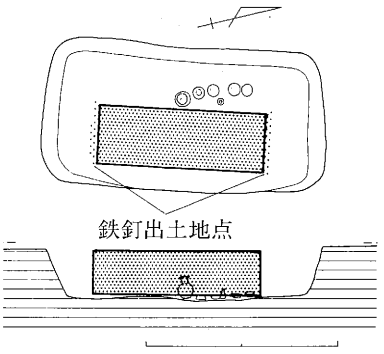


図11　鉄釘出土位置及び木棺想定図(1:80)

B　遺構外出土遺物（図9・16～22、図11）

（1）土器・陶器（図9・16～22）

20は、単節の斜縄文が施されており、縄文前期の土器と思われる。21・22は櫛描波状文の施された土器で、弥生時代後期の甕形土器である。16～19は平安時代の土器で、16は軟質の須恵器、17は土師器、18は黒色土器で、高台の付く皿である。19は灰釉陶器の椀の高台部分で、三日月高台に近似する。外面底部はヘラ削りナデ調整で、回転糸切り痕を消している。灰釉は一部分しか残存していなく不明瞭であるが、刷毛塗りであろうと思われる。

（2）石製品（図11）

1は磨り石である。楕円礫の一面のみに摩り面が認められ、平坦な面となっている。砂岩製で重量310g。A－4より出土し、縄文時代のものと考えられる。

2は硯である。長方硯で破損している。A－1出土で、中世か近世の所産であろう。

3は砥石である。長さ13.9cm、幅2.5cm、厚さ2.4cmをはかり、長方体の形態を示す。頁岩製と思われる。Cトレンチ出土で、時期は明確でない。

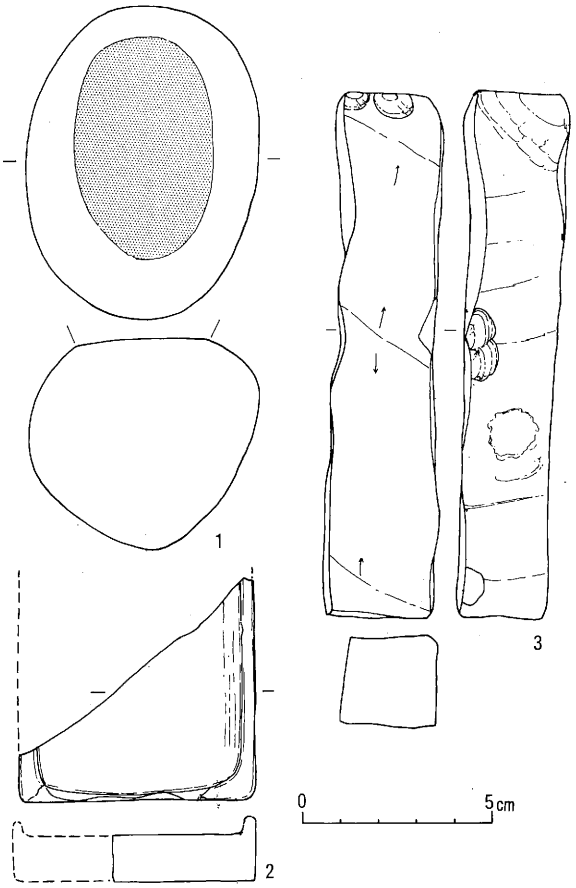


図12　遺構外出土石製品(1:2)

引用・参考文献

田中　清兒　飯山市有尾遺跡発掘概報　下水内郡遺跡発掘調査報告書　1950

森山　茂夫　外様村尾崎東長峰発掘調査報告(一)　下水内郡遺跡発掘調査報告書　1950

清水　亨　外様村尾崎東長峰発掘調査報告(二)　下水内郡遺跡調査報告書　1950

森山　茂夫　外様村尾崎長峰遺跡第７号住居址　水内会々報３　1951

東　道雄・清水　亨・森山茂夫・寺崎昭夫　下水内郡外様村東長峰遺跡３・４・５・６・７号住居址
下水内郡遺跡調査報告２　1951

小湊　渥美　飯山町有尾遺跡発掘報告　飯山北高郷土研究会々報　1952

小湊　渥美　下水内郡外様村顔戸遺跡調査報告　飯山北高郷土研究会々報　1952

飯山北高郷土研究会　下水内郡顔戸・尾崎遺跡発掘調査報告及び感想文集　1952

神田　五六　長野県下水内郡飯山町有尾遺跡調査概報　信濃５－８　1953

桐原　健　長峰尾崎遺跡の重要性　若木考古38・39合　1955

飯山公民館　飯山町誌　1954

信濃史料刊行会　信濃史料　第１巻上下　1956

桐原　健　北信長峰丘陵における弥生式遺跡　考古学雑誌45－１　1959

飯山南高考古学クラブ　長野県飯山市有尾遺跡調査概報　信濃13－12　1961

飯山南高考古班　飯山市有尾黄金石上遺跡調査略報　1963

桐原　健　飯山須多ヶ峰遺跡見学記　信濃考古51－３　1966

桐原　健　最近における長野県考古学会の成果－北信須多ヶ峰遺跡の紹介－　長野10　1966

高橋　桂　北信濃須田ヶ峰弥生式墓坑調査略報　考古学雑誌51－３　1966

文化財保護委員会　全国遺跡地図「長野県」　1967

高橋　桂　須多ヶ峰弥生式墓坑発見の鉄釧再報　考古学雑誌52－３　1967

高橋　桂　北信濃城端遺跡調査略報　信濃21－７　1969

飯山北高校地歴部　別府原遺跡　いにしえ３　1970

宮崎　博　飯山城址発見の中期弥生式土器　長野県考古学会誌９　1970

高橋　桂・太田文雄　北信須多ヶ峰遺跡第二次発掘調査報告　信濃29－４　1977

飯山北高地歴部ＯＢ会　遺跡分布調査報告Ⅰ　1977

飯山市教育委員会　北原遺跡調査報告書　1980

飯山市教育委員会　鍛冶田　1980

飯山市教育委員会　北原遺跡Ⅲ　1981

広瀬　昭弘　北信濃小佐原遺跡出土の表裏縄文土器について　信濃33－４　1981

金井　正三　縄文前期有尾式土器の再検討　信濃34－４

広瀬　昭弘　小佐原遺跡－長野県史考古資料編全１巻(2)主要遺跡「北・東信」所有
長野県史刊行会　1982

金井　正三　有尾遺跡－長野県史考索資料編全１巻(2)主要遺跡「北・東信」所有　長野県史刊行会　1982

桐原　健　東長峰遺跡、柳町遺跡－長野県史考古資料編全１巻(2)主要遺跡「北・東信」所有
長野県史刊行会　1982

高橋　桂　須多ヶ峰遺跡－長野県史考古資料編全１巻(2)主要遺跡「北・東信」所有
長野県史刊行会　1982

高橋　桂　北原遺跡－長野県史考古資料編全１巻(2)主要遺跡「北・東信」所有　長野県史刊行会　1982

飯山市教育委員会　北原遺跡Ⅳ　1985

第4章　結　　語

小佐原遺跡は、過去に2回調査が行われ、縄文時代草創期および弥生時代の遺跡として著名である。このことはすでに前章において触れたとおりである。

今回の調査区は、飯山市旭連絡所の周辺で前回の調査区よりも北側に偏し、台地西縁部に相当する。また、過去において地ならし工事が行われた場所であって、調査前から遺跡は壊されているものとして、調査の必要性についても疑問視されていた。東側が2m以上もカッティングされていた現状では当然ともいえる。市の教育委員会では、県文化課の小林指導主事および高橋市文化財審議委員の意見を求めたところ破壊されているかどうかの確認調査は必要であるとの指導を頂き、発掘調査を実施することとなった。

調査の結果は、予想通り大半が破壊されていた。台地上方の約半分を切り土し、その土を西側の低地に押し出して平地にしていた。ただし、そのカッティング部分と盛り土した接点の部分、旧地形では台地の端部と思われる箇所に偶然ともいえるほど僅かな部分に遺構が残されており、発掘の結果、平安時代の土壙墓が検出された。

土壙墓は、遺存状態がよく内部より多くの共献品や鉄釘が出土した。平安時代の土壙墓内より鉄製の釘が出土したのは寡聞にして類例を知らない。また共献品の出土は、県内で最近特に類例を増しつつあるが灰釉陶器など一級品の資料といえよう。また、具体的に当時の葬送儀礼を追究できる出土例である。飯山市内でも昭和53年より平安期墓地の発掘例が増加し5遺跡10例の共献品を伴った土壙が発見されている。このことについても、集成し公表する準備を進めているところである。

最後となったが、調査に当たっては、地元柳原地区の老人会に作業員の配慮をいただきいた。また、地区区長会長の前沢節朗氏、公民館柳原分館長の丸山昭治氏をはじめ多くの関係者のご協力をいただいた。ここに、あらためて感謝申し上げ結語とする。

（追記）

校正段階に至り、松本市石上遺跡で木炭を敷いた墓（石上遺跡土壙墓）の報文に接した。長さ3.6m、幅2.1m、深さ0.9mの大型土壙墓で、13枚の内黒土師器の坏と皿、1個の灰釉陶器長頸壺が納められ、また棺の形そのままに鉄釘が多数出土したという。（松本市教育委員会　1991　松本市里山辺　薄町・石上・鎌田遺跡－県営圃場整備に伴う緊急発掘調査概報－24ページ～27ページ）

第 2 編

関沢遺跡

第１章　調査経過

１　調査に至る経過

飯山市は1990（平成２）年度の新農村地域定住促進対策事業として瑞穂地区関沢に民芸関係施設の建設を計画した。その建設予定地が関沢遺跡の範囲内であるので建設場所の変更等を含めて1989（平成１）年度に遺跡の保護について協議を重ねたが、計画変更が難しいことにより、やむを得ず事前に発掘調査を実施して記録保存を計ることとした。

1989（平成１）年11月21日、県文化課小林秀夫指導主事とともに現地協議を行い、建物建設に伴い対象地の全面が削平される計画なので発掘調査は全面を対象とすることとなり、なお整地計画を再度見直しを含めて考えていただきたいとの要望がなされた。

発掘調査は1990（平成２）年に行うこととし、２ヶ月の期間を予定した。しかし1990年度は他にも大規模な発掘が相ついで計画されているため関沢遺跡の発掘調査は、国営飯山農地開発に伴う岡山地区の２ヶ所の発掘調査の終了後に行うこととなった。

発掘調査に伴う経費は事業主体者である飯山市が負担することとし、発掘調査は飯山市教育委員会が委託され、日本考古学協会会員・飯山市文化財保護審議会委員の高橋桂氏に調査団長をお願いした。

２　調査と整理

Ａ　発掘調査

関沢遺跡の発掘調査は９月11日から10月５日まで行ったが、雨等の理由で実際の現地作業は13日間である。調査対象地は約2300㎡であるが、崖面や削平されたと考えられる所をさけて調査区を設定し約800㎡を発掘調査した。調査期間中は秋の収穫時季と重なり作業員の方々にはなるべく都合をつけて出てもらえるようお願いしたが、人員が集まらないこともあった。また、台風19・20号が接近し、テント等の発掘器材の保全や現場の保全に時間を割かれた。さらに調査地の土壌が粘土質で雨が降ると足を踏み入れられないほど軟弱になり、晴れて乾燥するとジョレンの刃がたたないほど硬くなるというやっかいな性質のため精査作業が難渋した。

しかし関係者のご協力と参加者の努力で旧石器と、小規模な掘立柱建物・溝・土坑などが検出された。また後世に削平されたためか発掘面積に比べて遺物の出土は予想外に少ない。調査体制は以下のとおりである。

飯山市遺跡調査会（平成２年度）

顧　　問	小野沢静夫	市長（平成２年９月14日退任）
	小山　邦武	市長（平成２年９月15日就任）
会　　長	佐藤　春夫	市教育委員会委員長
副 会 長	長谷川元一	市社会教育委員長
委　　員	吉沢菊之進	市文化財保護審議会会長（平成２年10月26日退任）
	滝沢藤三郎	市文化財保護審議会会長（平成２年11月２日就任）
	藤沢賢一郎	市議会総務文教委員長（平成２年12月11日退任）

委　　員　丸山　豊雄　市議会総務文教委員長　（平成２年12月12日就任）
中村　　敏　市公民館長
高橋　　桂　日本考古学協会会員
山崎美都技　教育委員会委員長職務代理
浦野　昌夫　教育委員会教育長（平成２年12月24退任）
岩崎　　彌　教育委員会教育長（平成２年12月26日就任）
事務局長　佐藤　　清　教育委員会教育次長
事務局次長　渡辺　　博　教育委員会社会教育係長
事務局員　堀内　隆夫　教育委員会社会教育主事
望月　静雄　教育委員会社会教育係
樋山二二子

調査団

団　　長　高橋　　桂　飯山北高等学校教諭
担　　当　望月　静雄
調査員　常盤井智行
田村　児城
小林　新治
丸山　三二
常田　利夫

作業参加者（順不同・敬称略）

吉越国善・加藤袈裟男・吉越古寿・鷲野吉太郎・大平あおい・佐藤きさ子・宮本つぎ・吉越しげ（以上関沢）・武田美作（富田）・樋口栄（温井）・樋山巖（戸狩）・綿田茂実（高山村）

B　整理作業と報告書の作成

整理作業は市埋蔵文化財センター（旧第三中学校寄宿舎）で行った。整理期間は平成２年度の市内各所の発掘が目白押しだったためそれらの発掘や整理のあい間をぬって行った。

本書の作成については遺構図を常盤井が当たり、遺物の実測・トレースは桃井伊都子（上倉）が担当し、写真撮影は田村が担当した。編集は高橋団長指導のもと常盤井が行った。執筆者は目次に記した。

C　調査日誌抄

1990（平成２）年　関沢遺跡

９月６日（木）　重機による表土除去。

９月10日（月）　重機による表土除去。岡山トトノ池南遺跡から発掘器材を搬入。

９月11日（火）　Ａ９～現地にて発掘調査開始式を行う。基準杭打ち・テント設営等発掘準備を行い、併行して第１トレンチ東北隅からジョレンがけ精査を開始。地面が乾燥して硬く難儀する。

９月12日（水）　第１トレンチジョレンがけ精査続行。柱穴等遺構検出し始める。

９月13日（木）　雨のため現地作業中止。

９月14日（金）　第１トレンチジョレンがけ精査・遺構掘り下げ続行。Ｄ―２区の竪穴遺構は十字に畔を残して掘り下げるが浅く遺物の出土もない（ＳＫ１）。

９月17日（月）　第１トレンチ西端で溝ＳＤ２検出。掘り下げ開始。

9月18日（火）　雨のため現地作業中止。

9月19日（水）　ＳＤ２掘り下げ続行。第１トレンチ南端で土坑検出（ＳＫ２）。掘り下げ開始。台風19号接近とのことでテント等発掘器材をしまう。

9月20日（木）　台風19号の風雨のため現地作業中止。

9月21日（金）　ＳＫ１・ＳＤ１写真撮影。ＳＤ２・ＳＫ２掘り下げ続行。

9月25・26日（火・水）　雨のため現地作業中止。

9月27日（木）　ＳＫ２・ＳＤ２掘り下げ完了。写真撮影。第１トレンチ全体写真撮影の準備。

9月28日（金）　第１トレンチ全体写真撮影。大関橋東端ＢＭ318．２ｍを基準として調査地に標高をおとす。第２トレンチジョレンがけ精査開始。

9月30日（日）　台風20号接近のため急拠調査員でテントをはずす。

10月１日（月）　第１トレンチ地山を東西に断ち割る。午後雨のため現地作業中止。

10月２日（火）　第２トレンチジョレンがけ精査続行。

10月３日（水）　第１トレンチ遺構図作成。第２トレンチジョレンがけ精査。遺構は検出されない。

10月４日（木）　第１トレンチ地山土層図作成。第２トレンチジョレンがけ精査、西側写真撮影。調査地全体図作成。

10月５日（金）　第２トレンチ南部ジョレンがけ精査、写真撮影。調査地全体図完了。遺構畔はずし。発掘器材の撤収を行い現地作業を終了。終了にあたり調査成果などを簡単に記した発掘だより「かわら版関沢」を関係者に配布。

第２章　遺跡の位置と環境

１　地理的環境

関沢遺跡は長野県飯山市大字瑞穂（みずほ）関沢（せきざわ）に所在する。飯山盆地を北へ貫流する千曲川は現在飯山市街地の東辺から東北流し、盆地東辺にせり出す段丘につきあたって樽（たる）川と合流し北北西に向きを変える。関沢遺跡のある瑞穂地区は千曲川の東岸にあたり遺跡はちょうど流路変換点の東岸にあたる。この千曲川東岸は三国山脈に属する毛無（けなし）山（標高1649.7ｍ）の尾根が西へ幾筋も延び、尾根間に扇状地を発達させている。尾根の先端は段丘面をなして千曲川に接している。

関沢遺跡はこれら発達した段丘面に位置するが、段丘は西流を主としつつも復雑に入りくむ谷筋で分断されている。遺跡の所在する段丘ももともと南の宮中丘陵と一続きのものであったと考えられている。

いまこの丘陵を関沢丘陵と呼べば、丘陵はちょうど関沢集落から南々西へ延びる尾根状をなし、東は谷をもって山地と画され、西も小谷でより下位の段丘と画されている。丘陵は長さ350ｍ、幅30～50ｍをはかり、最高所は丘陵北寄りにあり標高約350ｍである。現在この丘陵の中央には旧野沢街道が北走し、西は主要地方道飯山・野沢線バイパスが走る。そして畑地が中心であった当地も近年住宅地として開発され宅地化が進んでいる。

当地の気候は冬期多雪の裏日本型だが、西斜面で西陽の当たりが良く、雪融けは早い方である。また奥深い三国山脈を水源にもつ湧水は、豊かでしかも味が素晴らしい。

２　歴史的環境

樽川との合流点以北の千曲川両岸に展開する段丘上は旧石器時代遺跡の宝庫である。戸狩以北をのぞいて現在わかっている遺跡を列挙すれば、北から日焼・屋株・上野・瀬付・内野・北竜湖・重地原・太子林・関沢・宮中・千苅・城ノ前・木原・小見と十数ヶ所が数えられる。発掘された遺跡も多く、日焼・屋株・上野・太子林・関沢・宮中・千苅があげられる。これらの遺跡の概要については望月が『小沼湯滝バイパス関係遺跡発掘調査報告Ｉ』の中でまとめられているので以下これを中心に概要を記することとする。

日焼遺跡は5000㎡以上の大規模な遺跡で便宜的に７地点に分けられている。1988年に発掘され、６群の石器群が検出された。特徴はスクレイパーが多量にあることで総数113点にのぼる。石材では大型のスクレイパーは安山岩を使用し、小型の同種器具に黒曜石を使用している。年代は小型のナイフ形石器が出土したことからナイフ形石器の終末に位置付けられている。また、発掘地点とは異なる地点でも100点以上の石器が採集されており中に挙大の黒曜石石刃石核がある（飯山市教育委員会　1989）。

屋株遺跡も1988年に発掘され、1ヵ所の旧石器集中部があり約90点の石器が出土したがトウールは少ない。「横倉型」尖頭器が２点、細部加工剝片が２点ある。石材は安山岩が主体である。(飯山市教育委員会 1989)。

上野遺跡は1989年に発掘され、５集中地点・２礫群が検出されている。集中地点は後の遺構で攪乱されている部分が多い。礫群は純粋な厨房施設と考えられる出土状態である。出土した石器は時期的に大きさの差はないと考えられているが、尖頭器・掻器を中心に彫器・ナイフ形石器・石錐・磨製石斧・剝片等バラエティに富んでいる。石材は地元産の安山岩のほか玉髄が多用され、しかも掻器との結びつきが強く、搬入品とも考えられている。年代的には「横倉型」尖頭器の出土から先土器時代終末に位置づけられている。(飯山市教育委員会　1990)

太子林遺跡は1980年に発掘され、３ヵ所の集中地点が確認され、ナイフ形石器・掻器・彫器・錐・刃部

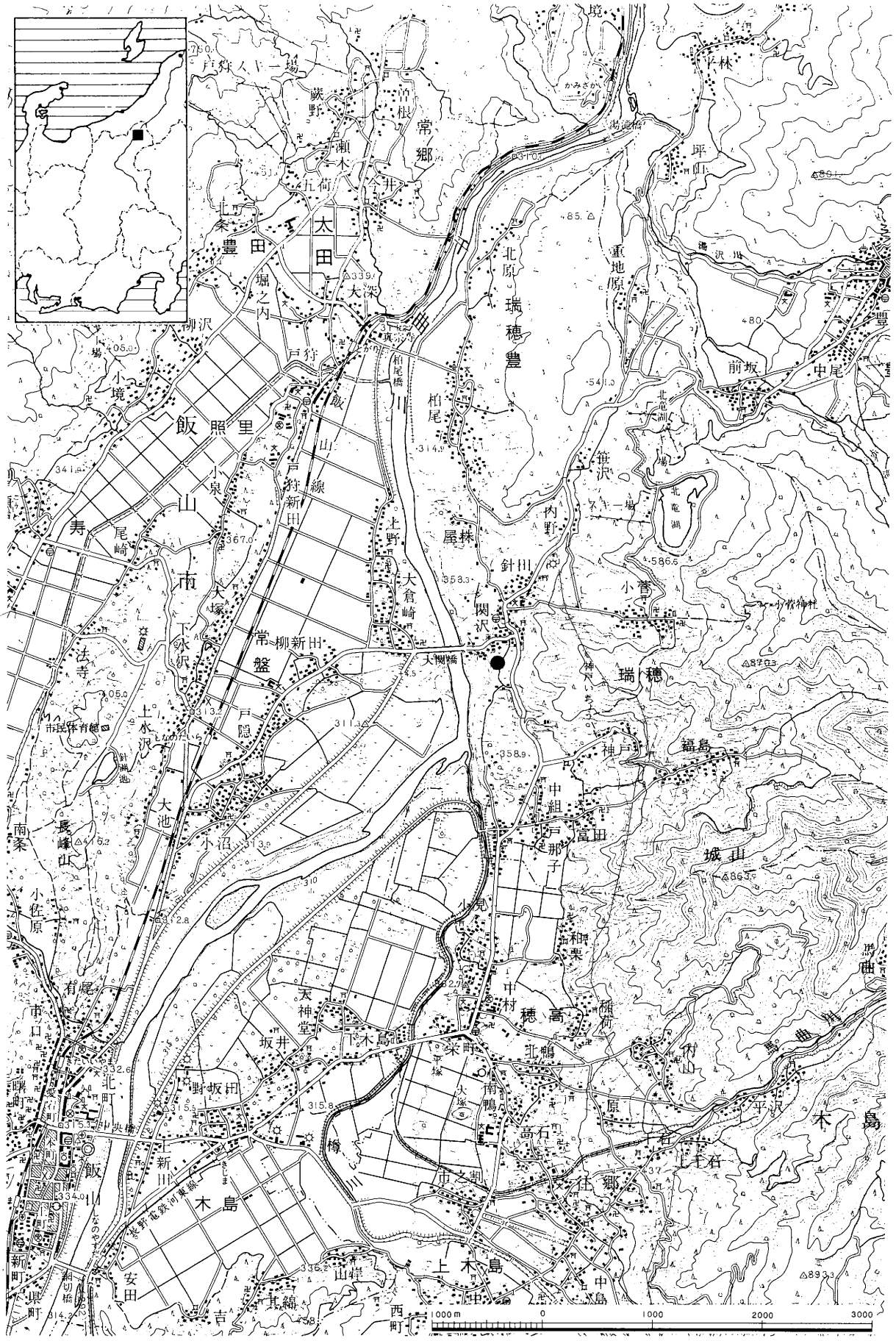


図１　遺跡の位置（1：50,000）

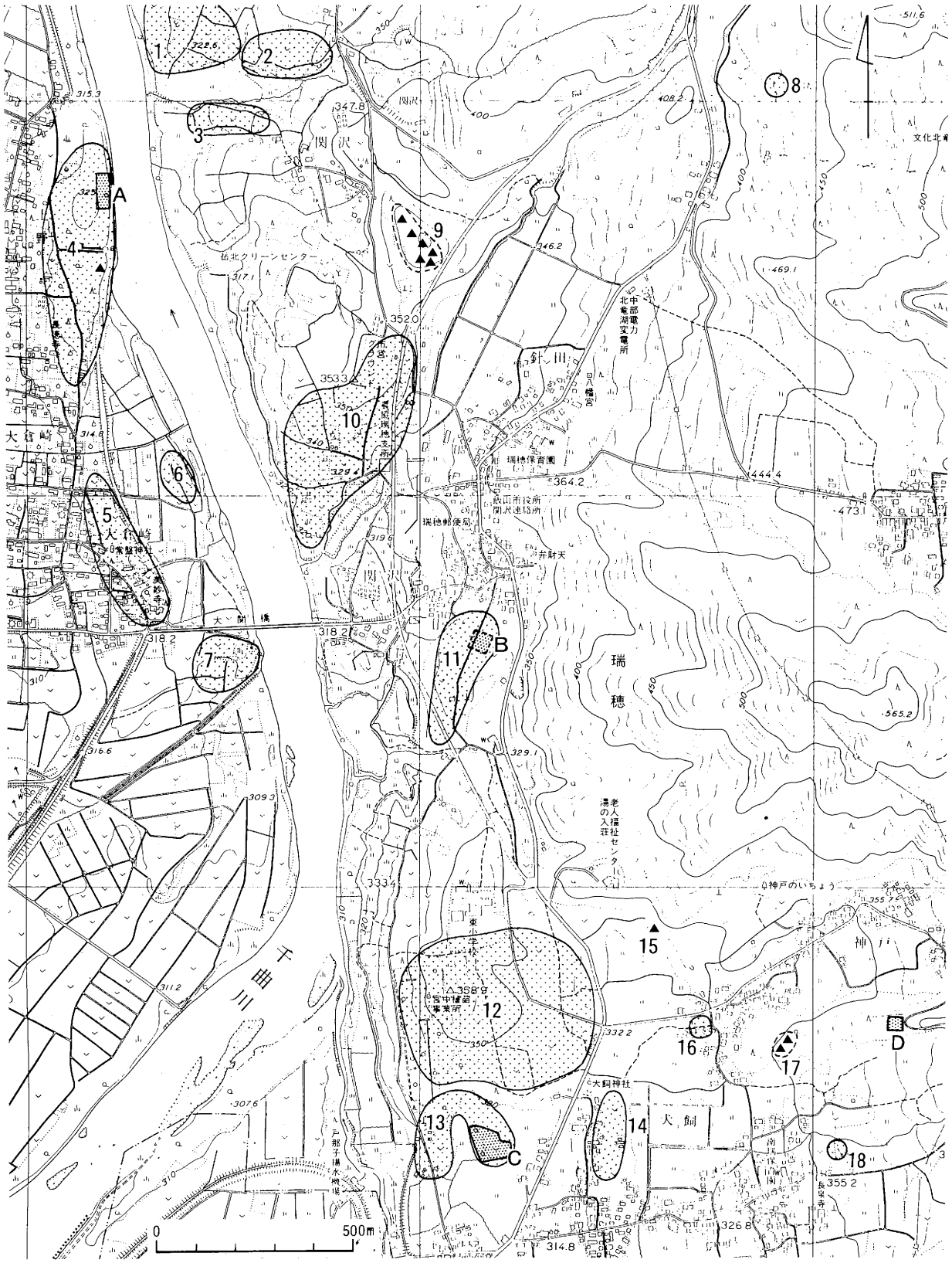


図２　周辺遺跡分布図（1：15,000）

１日焼（先・平）　２南原（縄）　３屋株（先・縄・平）　４上野（先・縄・弥・古・平）　５大倉崎（縄・古・平・中）
６大倉崎Ⅱ（縄・平）　７瀬附（先・縄）　８内野（先）　９向峰古墳群　10太子林（先）　**11関沢（先・中）**
12宮中（先・縄）　13千苅（先・平）　14城の前（先）　15飯綱堂古墳（狐塚）　16猿飼田（平）　17神戸古墳群
18木原（先・縄）
Ａ大倉崎（上野）館跡　Ｂ関沢館跡　Ｃ犬飼城館跡　Ｄ神戸城

磨製石斧・石核・ハンマーなど約600点が出土している。ナイフ形石器は黒曜石・頁岩を使用し、基部加工と二側縁加工の二形態がある。掻器は刃器状剥片の端部に雑な刃部を作出したエンド・スクレイパーのほかに不定形な剥片の周囲に刃部を作出した例もある。石核は、安山岩・頁岩が確認されており打面調整の施された長方体を呈する。これらの石器群については、野川編年（小林・小田1973）の第II期に位置づけられている。(飯山市教育委員会1981）。

関沢遺跡も1980年に発掘され1カ所の石器集中部が検出されている。尖頭器・掻器・尖頭削器等が出土している。尖頭器は両面・半面加工の両者があり、1点柳葉形の尖頭器がある。報文では野川III期に位置づけ、その後の検討で山形県越中山、富山県立美遺跡出土石器群に比定されている(望月1982)。

宮中遺跡は1978年に発掘され縄文後期の石棺状遺構が検出された遺跡として有名だが、それに先立つ分布確認調査で安山岩製のブレイドと剥片が出土している(飯山市教育委員会　1979）。

千苅遺跡は1989年に発掘されているが発掘以前にも300点の石器が採集されている。尖頭器・スクレイパー・細石核で、種々のバリエーションをもった尖頭器が特徴的である。年代的には関沢石器群→（細石器）→千苅石器群→横倉遺跡とされている（中島1982）。発掘では数点の石器が出土している（飯山市教育委員会1990）。

城の前遺跡では薄手の両面加工の尖頭器が6点採集されており先土器時代最終末期とされている。内野遺跡では黒曜石のエンド・スクレイパーが、山岸遺跡では黒曜石の尖頭器・エンド・スクレイパーが採集されている。北竜湖遺跡では尖頭器・丸ノミ形石斧が湖岸より採集されている（望月1980）が縄文草創期の遺物も採集されているため土器出現以後に位置づけられる可能性がある。

縄文時代の遺跡は、草創期から早期に北竜湖があげられ、前期には大倉崎・瀬付・北竜湖がある。大倉崎遺跡は3回の発掘等で竪穴住居跡7棟が丘頂を囲むように検出され、多量の前期後葉の土器・石器が出土している(飯山市教育委員会1990)。中・後期の遺跡として宮中遺跡がある。宮中遺跡は1979年に発掘され後期の石棺状遺構(石棺墓)23基が検出され葬礼用浅鉢・漆塗櫛・耳栓状耳飾等が出土している(高橋桂1980)。

弥生・古墳時代の遺跡は千曲川東岸には多くない。西岸の上野遺跡で弥生時代中・後期の竪穴住居跡と古墳時代前期の竪穴住居跡と方形周溝墓が検出されている。古墳時代前期の土器は北陸地方に類例があるもので注目される。

古墳は上野に1基、向峰に6基が発見されているがいずれも小型の円墳である。飯綱堂狐塚古墳は飯山地方には珍らしい横穴式石室墳で石室が露出している。

平安時代は当地の開拓が再び進む時代で遺跡も急増する。屋株・上野・千苅・大倉崎・大倉崎II・猿飼田等の遺跡である。上野遺跡・屋株遺跡は発掘され竪穴住居跡や掘立柱建物跡が検出されている。

中世は小菅山が北信濃三大霊場として知られ、山岳仏教の一大修験場であった。また在地土豪が成長し所々に彼らの城館跡が残されている。大倉崎（上野）館跡、犬飼城館跡はその代表的なもので、当遺跡のある関沢丘陵の丘頂付近も関沢館跡に推定されている。山城も多く東岸屋根線上には未発見のものも含めて多くの城跡が存在するものと予想される。

参考引用文献

「新編瑞穂村誌」1980　新編瑞穂村誌刊行会

「小沼湯滝バイパス関係遺跡発掘調査報告Ⅰ－日焼遺跡・南原遺跡・屋株遺跡・大倉崎館跡」1989　飯山市教育委員会

「小沼湯滝バイパス関係遺跡発掘調査報告Ⅱ－上野遺跡・大倉崎遺跡」1990　飯山市教育委員会

「宮中遺跡分布確認調査報告書」1979　飯山市教育委員会

「太子林・関沢遺跡」1981　飯山市教育委員会

「千苅遺跡の研究」1990　飯山市教育委員会

第３章　遺跡の概要

１　遺跡の概要と過去の調査

関沢遺跡は前述の関沢丘陵全体にまたがる遺跡で、1972年に飯山北高地歴部員の踏査で黒曜石の細片を２点採集したことが発見の契起となった。その後地元在住の鈴木勘治氏が３点の石器を採集しその中に槍先形尖頭器の未製品と思われる石器が含まれており、旧石器時代の遺跡として注目されることとなった。

1980（昭和55）年県道飯山・野沢温泉線改良工事（関沢バイパス）に伴う緊急発掘調査が行われた（飯山市教育委員会1981）。発掘地点は今回調査地の南約50ｍの所で、丘陵南斜面に位置し、南側へは緩く傾斜し、西側は急崖となって小開析地に臨んでいる。当時の現況は休耕田である。今回調査地より約５ｍ低い。発掘面積は約140 ㎡と狭いながらも礫・石器約200点が８×５ｍの範囲に集中するユニット１か所を検出している。石器出土層位は褐色テフラ層最上部から黒色土への漸移層にかけての層位である。出土石器は槍先形尖頭器（図５、１～７）、槍先形尖頭器の二次加工品（同８、９）、尖頭削器（図６、10～17）掻器（図７、18～24）、縦長剥片の縁部に若干の細部調整を施したもの（同26・27）、両面加工石器（同25）がある。石材は21～23が安山岩で他は頁岩製である。

礫群はユニットの中心部のやや南西側にあり∅３～８㎝の円礫約20点が1.0×1.2ｍの範囲にある。礫は火をうけて変色したり破損しているものが認められ、タール状付着物が付いているものもあり、厨房と推定されている。

また砕片の分布状況や石器の作出にかかる第１次工程の剥片類が極めて少量であることから、石器製作は素材作出までは他の地点で行われ、二次加工は本ユニット内東側の砕片分布地点で行われたと推定されている。

これらの石器群の年代については報文では野川Ⅲ期に位置づけられ、さらに、後の検討で山形県越中山、富山県立美遺跡出土石器群併行期に細分されており（望月1982）、また飯山地方の先土器時代編年予察では、尖頭器が主体的な石器組成となる飯山Ⅲ期におかれている（望月1989）。

今回の調査地は舌状につき出た台地の先端部で、上面に南西に緩く傾斜する平坦面をもち南、西へゆるく傾斜する斜面へと続く。現況は段畑と栗林である。東に旧野沢街道が接している。

参考引用文献

『太子林・関沢遺跡』1981　飯山市教育委員会

望月　静雄「北信濃関沢遺跡の石器群」『信濃』34－４　　1982

望月　静雄「飯山地方の先土器時代編年予察」『小沼湯滝バイパス関係遺跡発掘調査報告Ⅰ』　1989
飯山市教育委員会

２　調査方法

調査方法　今回の調査は旧石器ユニットの検出された1980年調査地の北約50ｍと近接しているのでまず旧石器の検出を第一目的とし、また丘頂の関沢館跡推定地に関連する遺跡の検出も予想された。調査地の現況は畑地および栗林であり、栗林の所は崖および傾斜地なのでそこを土置き場とし、畑地を中心にトレンチを設定した。調査はまず重機で表土（耕作土）除去を行い、後にジョレン・移植ゴテ等で慎重に掘り下げ遺構・遺物の検出につとめたが、遺構面の土質が乾くとジョレンの刃がたたないほど硬くなり、雨が降れば足を踏み入れられないほど軟弱になるので作業が難渋した。遺物の取り上げは基本的には１点づつ

図３　調査地周辺の地形(１:４,０００)

位置と高さを測って取り上げたが、遺構土と一括した場合もある。遺構図は平板測量を行い、写真は白黒とカラースライドで適宜撮影した。

調査区の設定　調査地内の地区割りについては調査対象地北端の地堺杭を基準として５ｍ方眼を組み西からＡ・Ｂ・Ｃ……北から１・２・３……と命名した。方眼の方位は約ＭＮ19°Ｅである。標高は大関橋東端の318.2 ｍを基準とした。なお調査地が段々畑の上段と下段に分かれているので便宜的に上段を第１トレンチ、下段を第２トレンチと呼称した。

層序（図８）　調査区内の層序は耕作土（暗灰色土）の直下が地山である。地山は第１トレンチでは上から黄白色粘土、茶褐色砂、黄褐色粘質土が東へ傾斜して重なっている。黄白色粘土層には所々桃色の所があり、またヒビ割れの間に鉄分が嵌入してできた様な鉄分の帯が幾条も走っている。茶褐色砂層は細かい砂がかたくしまった層とφ５～10mmの粗い砂層とが10～20cm単位でサンドイッチ状をなしている。黄褐色粘質土は前回調査で最上部から旧石器が出土した褐色テフラ層と同じ層と考えられる。第２トレンチは黄褐色粘質土層（褐色テフラ層）が地山である。

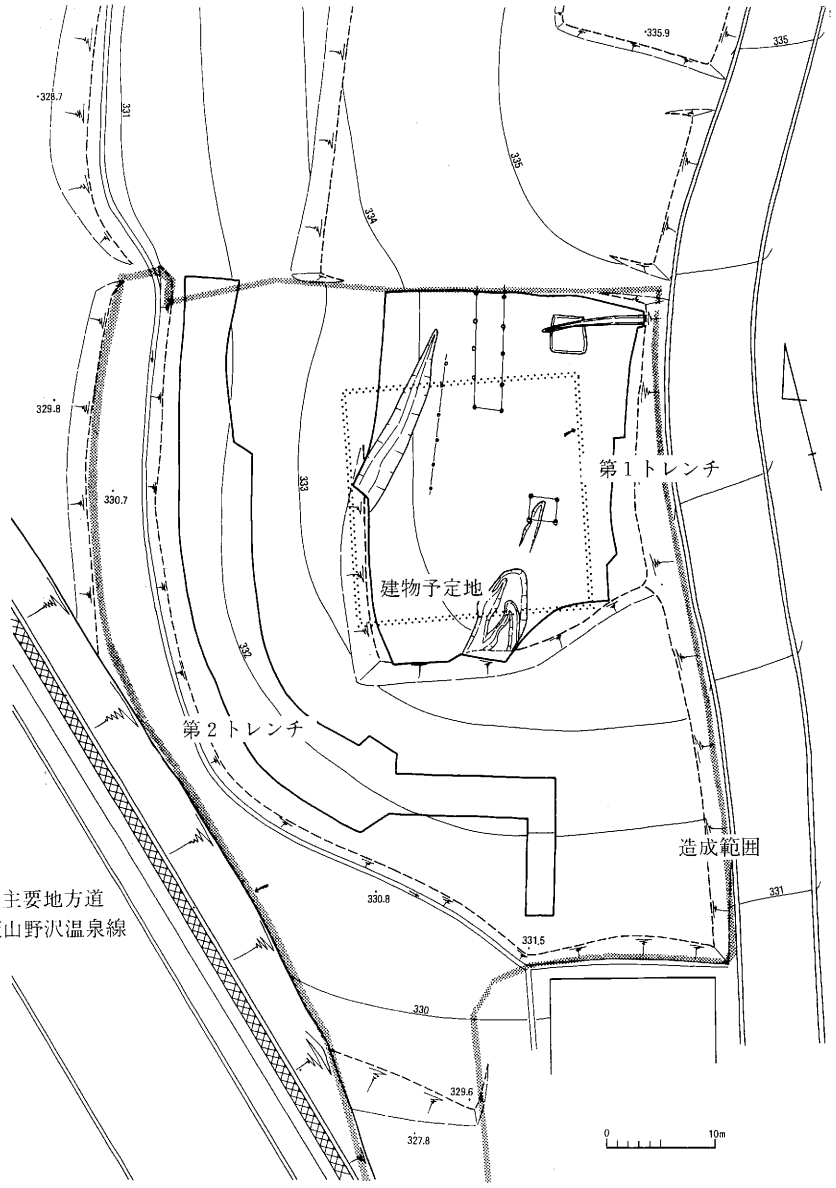


図４　調査地全体図（1：600）

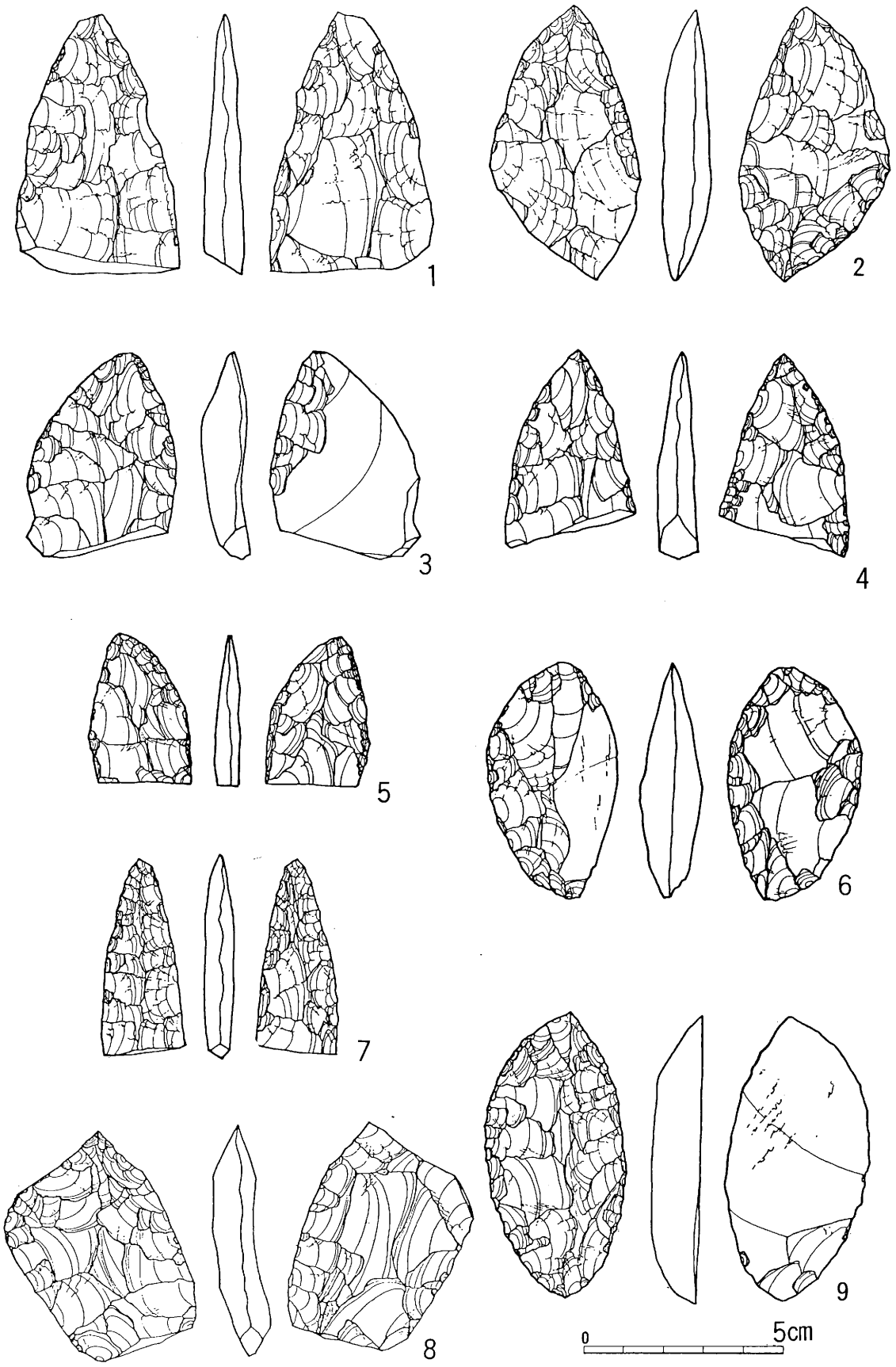


図５　関沢遺跡1980年出土旧石器(1)(１:1.5)

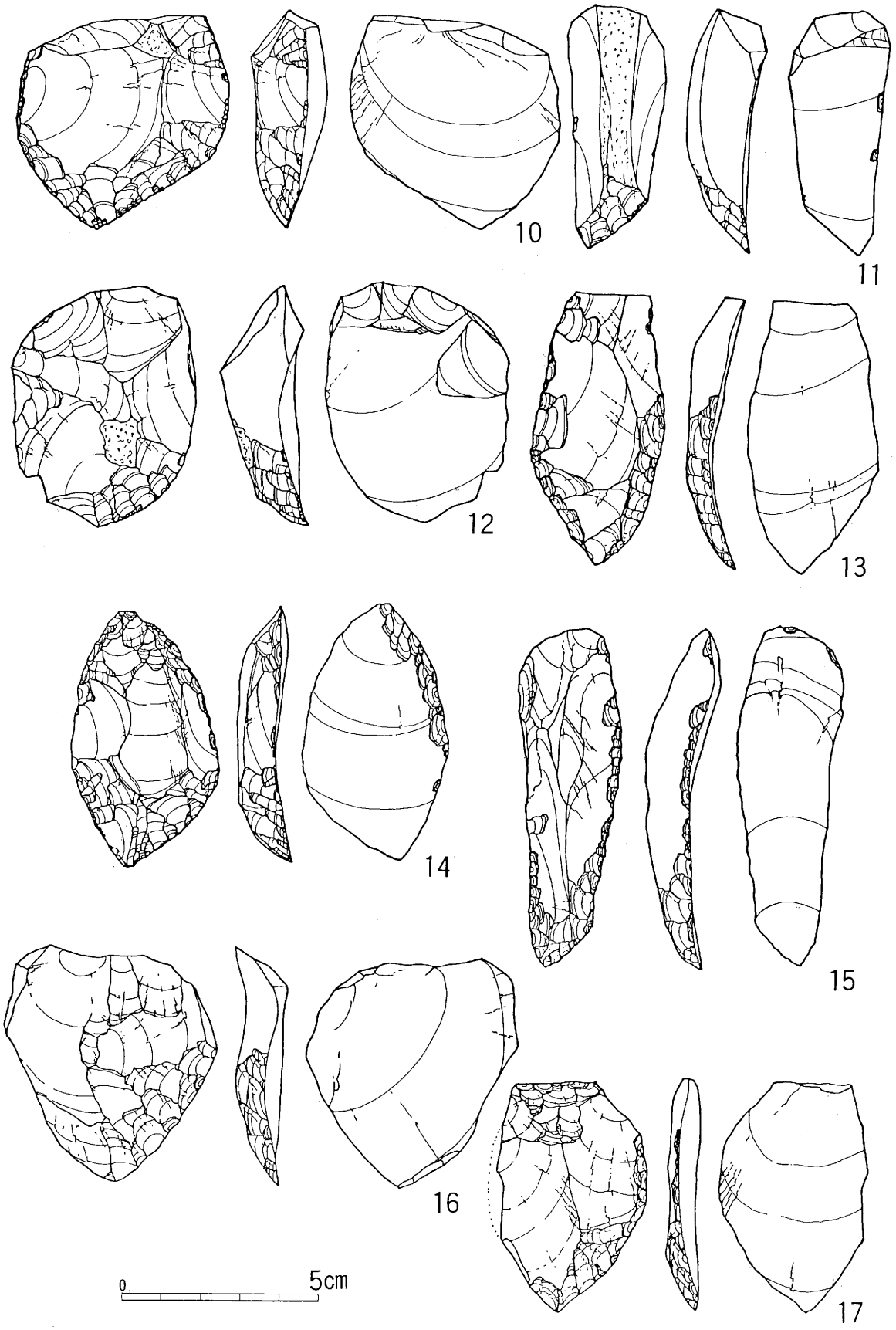


図６　関沢遺跡1980年出土旧石器(2)(１:1.5)

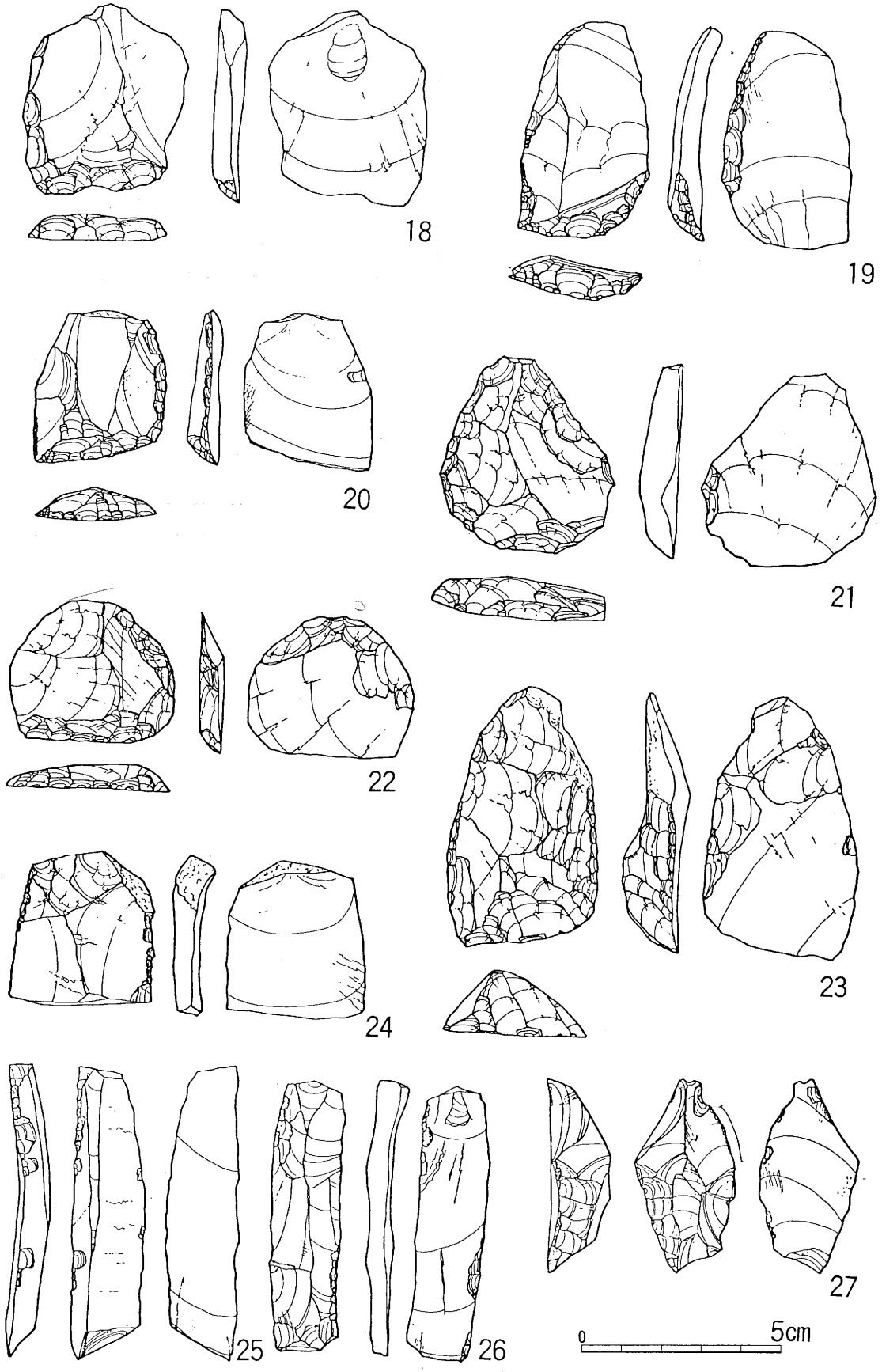


図７　関沢遺跡1980年出土旧石器(3)(１:1.5)

第４章　遺構（図８）

A　掘立柱建物

ＳＢ１　Ｅ・Ｆ－２・３区にある南北棟の建物で、北は調査地外へ延びる可能性がある。規模は南北４間以上（8.6 m以上）×１間（２ｍ）と細長い。柱間寸法は2.1 ｍ（７尺）前後とそろっているが、直角に対応していない。西側柱列が北へややずれる。柱穴のプランは円形で∅20～30cm、深さは10～40cm。出土遺物はなく年代は不明だが柱穴埋土は新しい感じがする。

ＳＢ２　Ｄ・Ｅ－４・５区にある東西１間（２ｍ）×南北１間（1.8 ｍ）の極く小規模な建物である。柱穴のプランは南北に長い隅丸方形で20×30～30×40cm。深さは20～30cm。出土遺物はなく年代不明だが規模・方位・埋土等からみてＳＢ１と同年代と考えられる。ＳＤ３を切る。

B　柵

ＳＡ１　Ｆ－２～４区にＳＤ２に添うような恰好である柵で５間（9.3 ｍ）分を確認している。柱間は1.8 ～2.1 ｍ。柱穴のプランは円形で∅15～20cm。深さ15～20cm。出土遺物はないが方位・柱穴の恰好・規模・埋土などからＳＢ１・ＳＢ２と同じ時代と考えられる。

C　溝

ＳＤ１　Ｃ～Ｅ－２区にあたる西～東へ延びる溝で東は調査地外へ続く、断面形は台形ないし半円形でもともとは台形に掘り込まれていたのだろう。埋土は黒色土でＳＢ１・ＳＤ２・ＳＡ１に近い。ＳＫ１を切る。幅は0.3 ～0.7 ｍ。

ＳＤ２　Ｆ・Ｇ－２～５区にある東北～南西へ延びる溝で南西は調査地外へ続く。幅は南西にゆくにつれて広がり、南西端で2.5 ｍを測る。断面は船底形。埋土は黒色土でＳＤ１などに近い。出土遺物に頁岩製の剝片（図９・２）と、土師器と考えられる土器小片があるが両者とも混入品であろう。

ＳＤ３　Ｅ－５区にある北東から南西に延びる溝で4.5 ｍを確認している。南西端は途切れているが、埋土がＳＫ２とよく似ておりＳＫ２につながる可能性がある。断面は半円形、出土遺物はない。ＳＢ２に切られる。

D　土坑

ＳＫ１　Ｄ－２区にある方形土坑で、プランは一辺2.7 ｍの方形である。壁の立ちあがりはゆるやかで底面はほぼ平坦であるが、深さは北へやや深くなり10～15cmである。埋土はやや色のうすい黒色土。出土遺物はない。ＳＤ１に切られる。ＳＫ１は当初竪穴住居跡と考えたが、出土遺物がないこと、伴う柱穴がはっきりしないこと、規模が小さいこと、底面が床と考えにくいことなどから土坑としておいた。しかし前記の条件は必ずしも竪穴住居跡であることを否定するものではなく、小規模な竪穴住居跡の可能性はなお残っている。

ＳＫ２　Ｅ－６・７区にある土坑で南西端は崖で切られている。プランは東北～南西に長い楕円形をなし、確認長6.3 ×3.6 ｍをはかる。底面は波うつ様に凹凸があり南西にゆくにしたがって深くなる。埋土は３層に分かれ最上層および中層は暗茶灰色で、中層に∅１cmぐらいの炭粒を多く含む。下層は均一な暗灰色土である。出土遺物にくぼみ石（図９、３）と石器かどうかあやふやな拳大の石などがあるが混入品の可能性が高い。

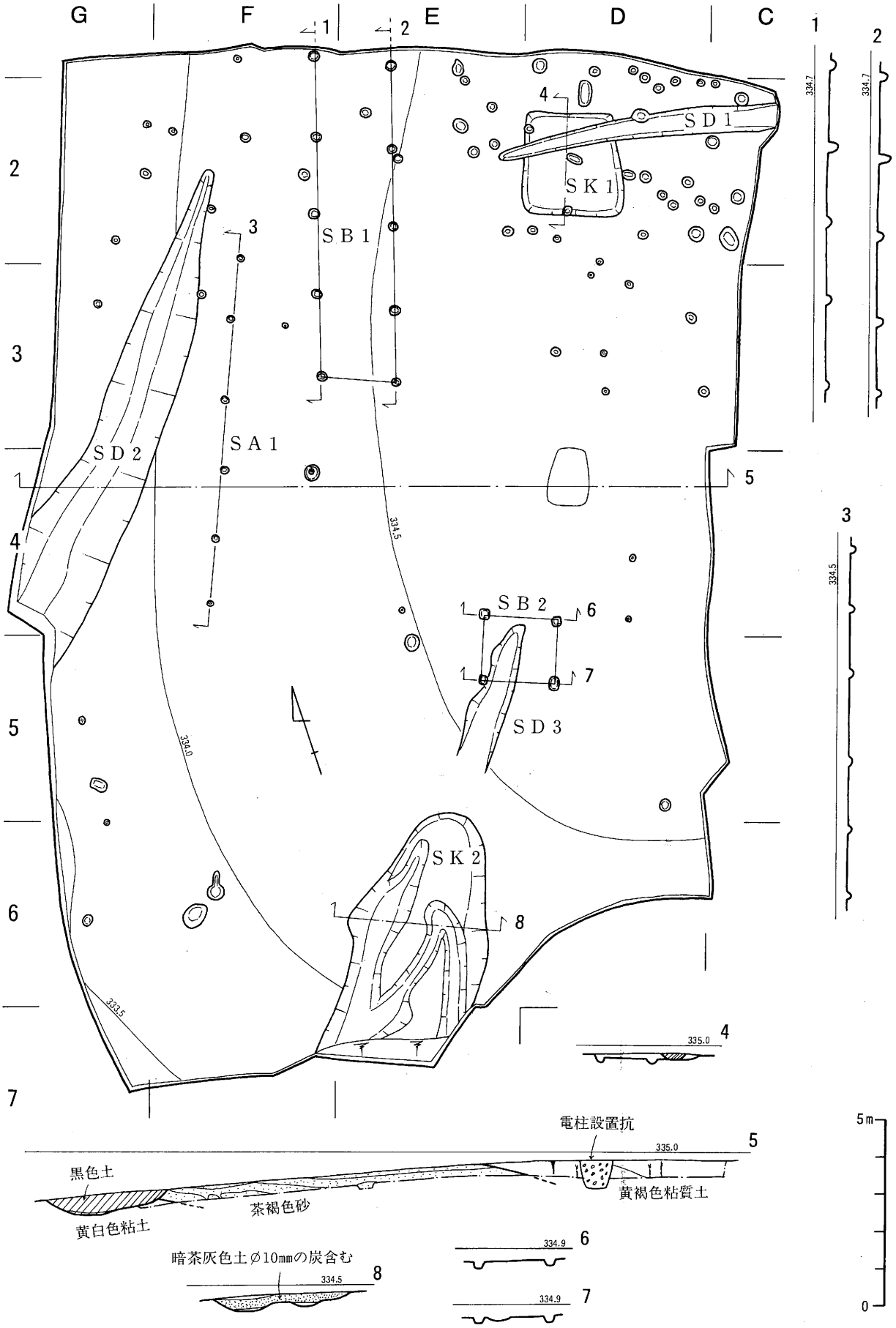


図８　第１トレンチ全体図(１:150)

第５章　遺物

Ａ　旧石器（図９　１・２）

旧石器と考えられる石器剥片が２点ある。１は側辺の一部と下端を出土時点に欠損しているのでよくわからないが、一部を二次加工した製品ないし剥片石器の可能性がある。Ｄ－５区出土。２は原石表面が残る頁岩製の剥片である。ＳＤ２出土。

これらの石器は二次的な攪乱面からの出土であり点数も少ない。しかし両者が頁岩製品であるのは出土石器のほとんどが頁岩製品である1980年調査地出土石器群に等しく、関連が予想される。

Ｂ　くぼみ石（図９　３）

くぼみ石が１点ＳＫ２から出土している。半分を欠いているが、ほぼ楕円形のものと考えられ、両面の中央と側面が使用されている。重さ309 ｇ。なお、図示していないがくぼみ石等の石器の可能性がある拳大の石がＳＫ２から出土している。

Ｃ　その他

ほかに図示していないが、弥生中期と考えられる口唇部に縄文をめぐらす壺ないし甕の口縁部片１片と近世以降と考えられる陶磁器類が少量ある。拳大の礫は使用痕こそ認められないが地山にはない石なので遺物と考えられる（ＰＬ15）。

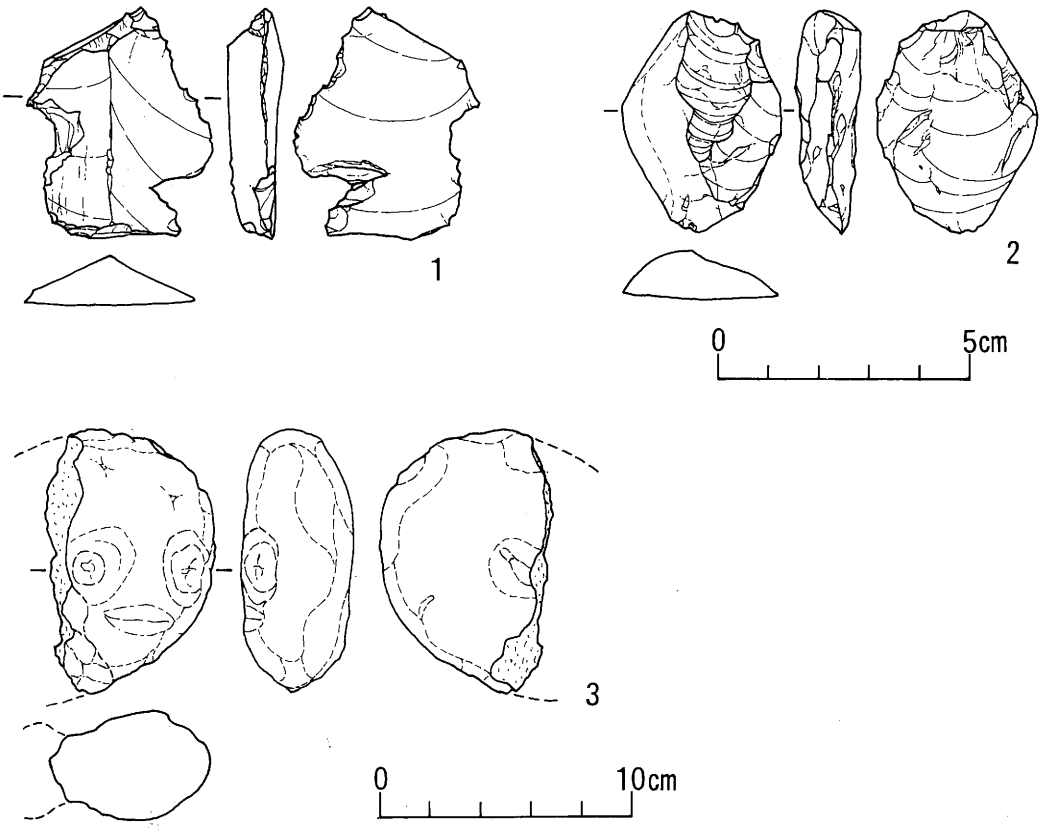


図９　出土遺物（1:1.5）（1:3）

第6章　結　語

関沢遺跡は、昭和46年に当時の飯山北高等学校地歴部員が微小な黒曜石の剥片を採集したことが発見の端緒となった。また、地元在住の鈴木勘治によって採集された3点の石器のなかに尖頭器の未製品も含まれていることが明かとなり、旧石器時代の遺跡であると注意されるようになった。

昭和55年、遺跡地内に関沢バイパスが通過することとなり、飯山市教育委員会が緊急発掘調査を実施した。このことについてはすでに常磐井が前章において触れたとおりであるが、1ユニットから尖頭器を中心とする石器群が発見されている。これら石器群の編年的な位置付けについては、当時の日本的に統一的な編年試案であった野川編年に照らして野川Ⅲ期に位置付け、さらに南関東編年のフェイズⅣ期に相当させた。これは、ナイフ形石器盛行以後の石器群であるということで、基本的な差異はない。その後白石浩之氏は、『石槍の文化』の中で本遺跡石器群を取り上げ、先土器時代末から縄文草創期に位置付けられる石器群であるとされている。本地域では、細石器群との関係が今ひとつ明瞭でないことや、横倉型尖頭器とは明らかに異なった尖頭器石群であることを考慮すれば、もう少し古い段階に位置付けられるのではないだろうか。

さて、今回の調査では旧石器時代の石器を始め遺物は微小であった。前回の調査区とは接する地区でありながら、ほとんど発見することができなかったのは、包含層がほとんど残っていなかったことが大きな要因として考えられる。また、前回の調査区に接しているものの一段高位の面であって、遺跡が狭小な範囲に限定されている可能性も考えられる。しかしながら、微小ながらも痕跡が確認されたことは、本丘陵の残された部分に遺跡主体部が存在することも可能性として大いに残っている。今後とも本丘陵の埋蔵文化財包蔵地の範囲を明確にする努力を続けるとともに、将来的に開発が行われるであろうと思われる本地域の遺跡を少しでも現状のまま後世に残せればと切望している。

最後に、本調査に精力的に御尽力をいただいた作業員各位、地元関沢区長の佐藤宏明氏、地権者の佐藤春夫氏をはじめ多くの御協力をいただいた関係各位にお礼を申し上げ結語とする。

PLEAT

小佐原遺跡航空写真

調査区近景

調査状況

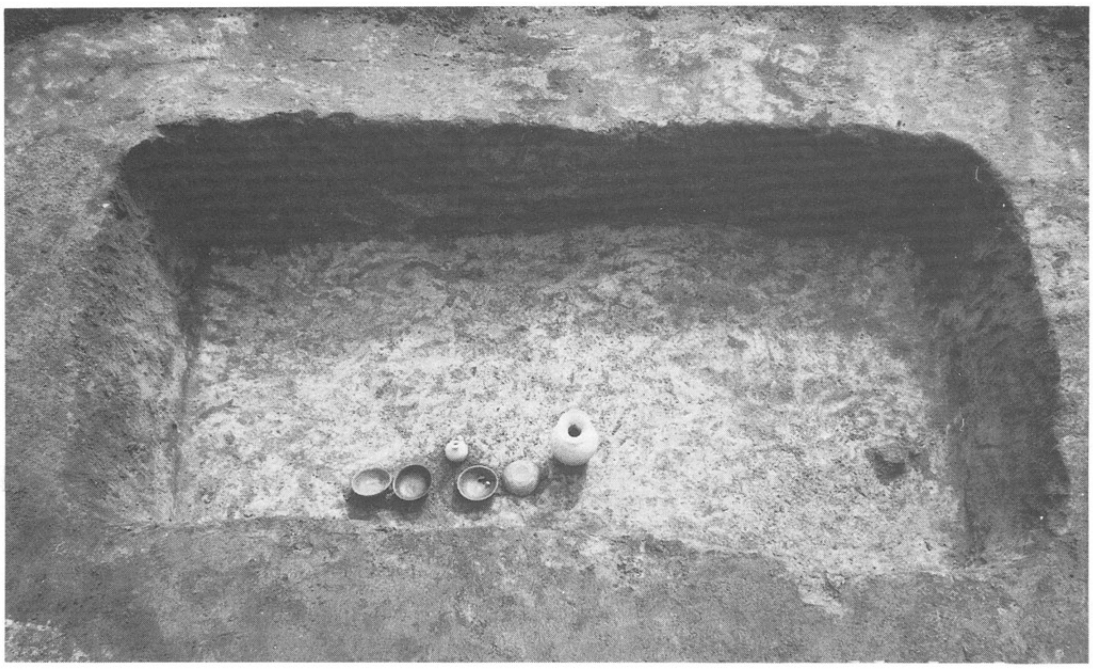
調査風景

調査風景

木棺墓確認状況(東より)

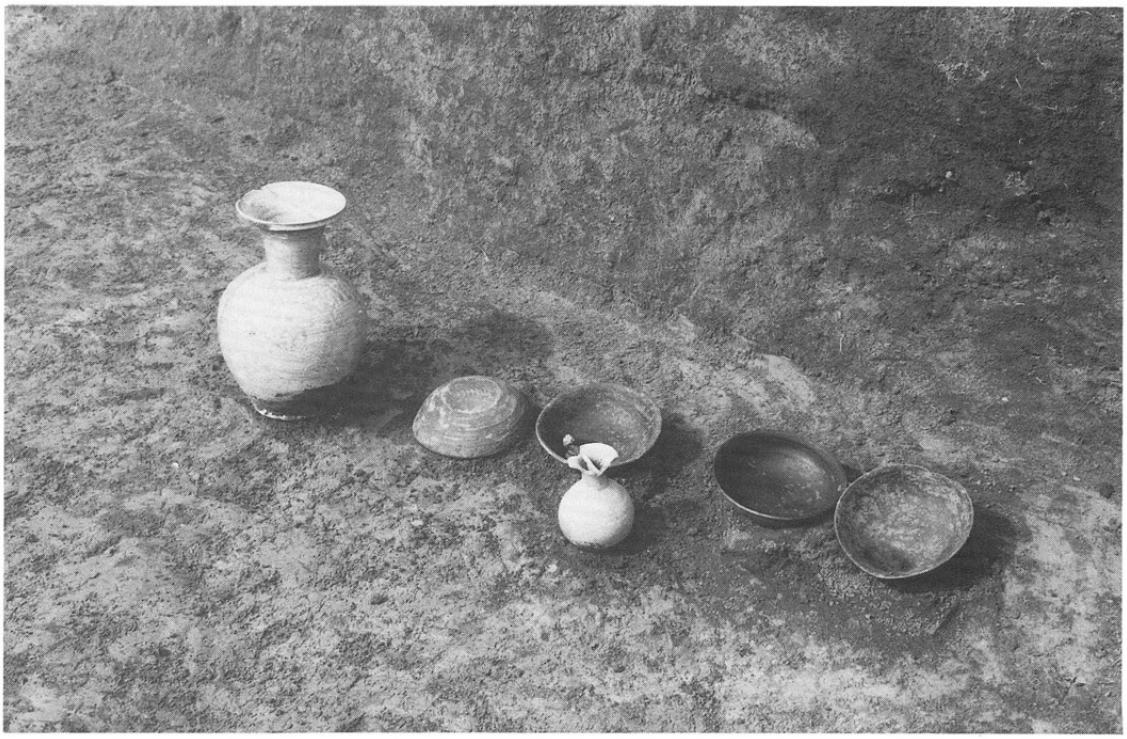
調査状況

木棺墓精査状況(南より)



遺物出土状態(西より)

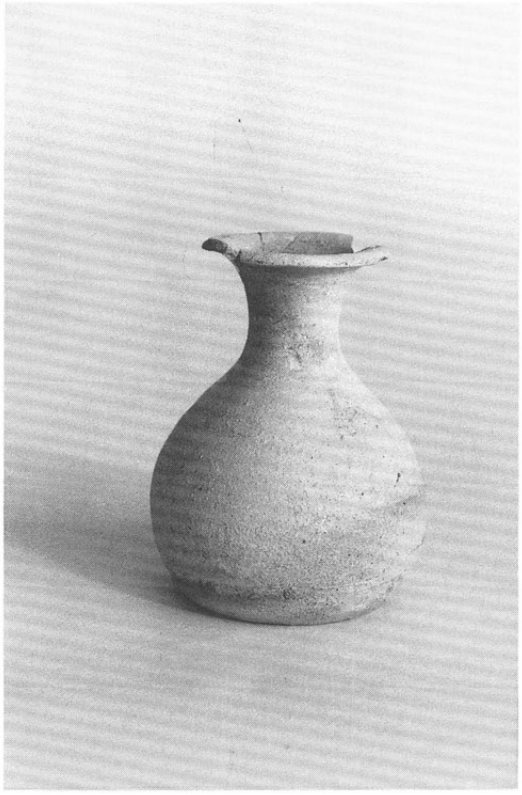
木棺墓遺物出土状態(南より)



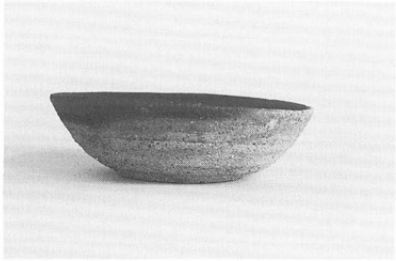
遺物出土状態(東北より)

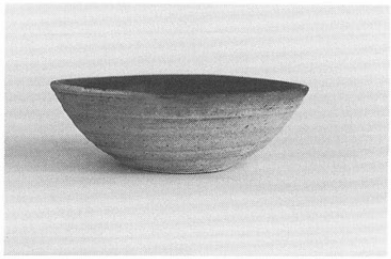
木棺墓出土遺物

灰釉　長頸瓶

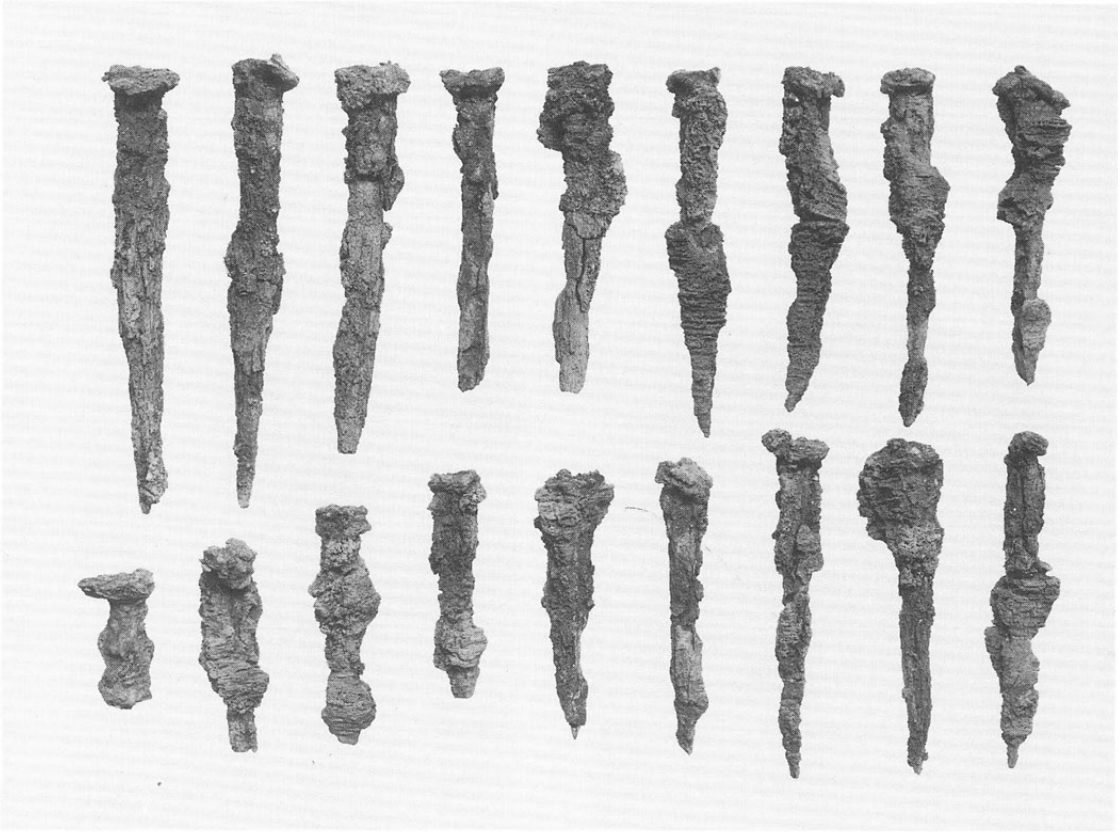


灰釉小瓶

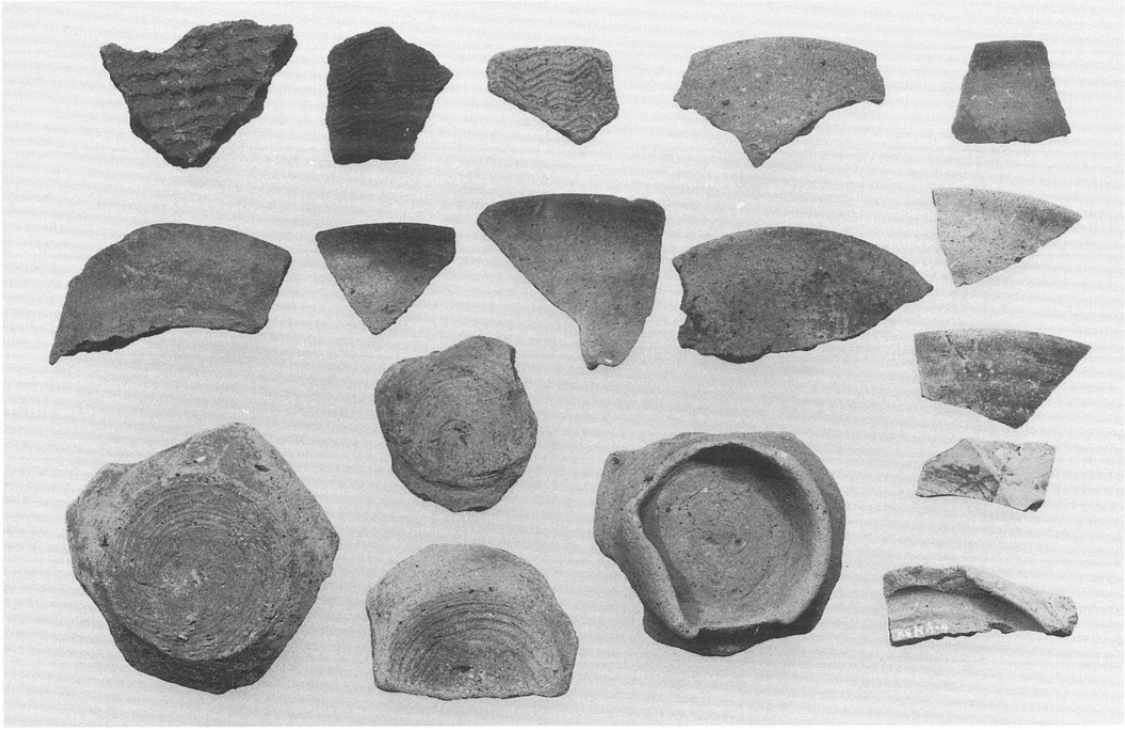




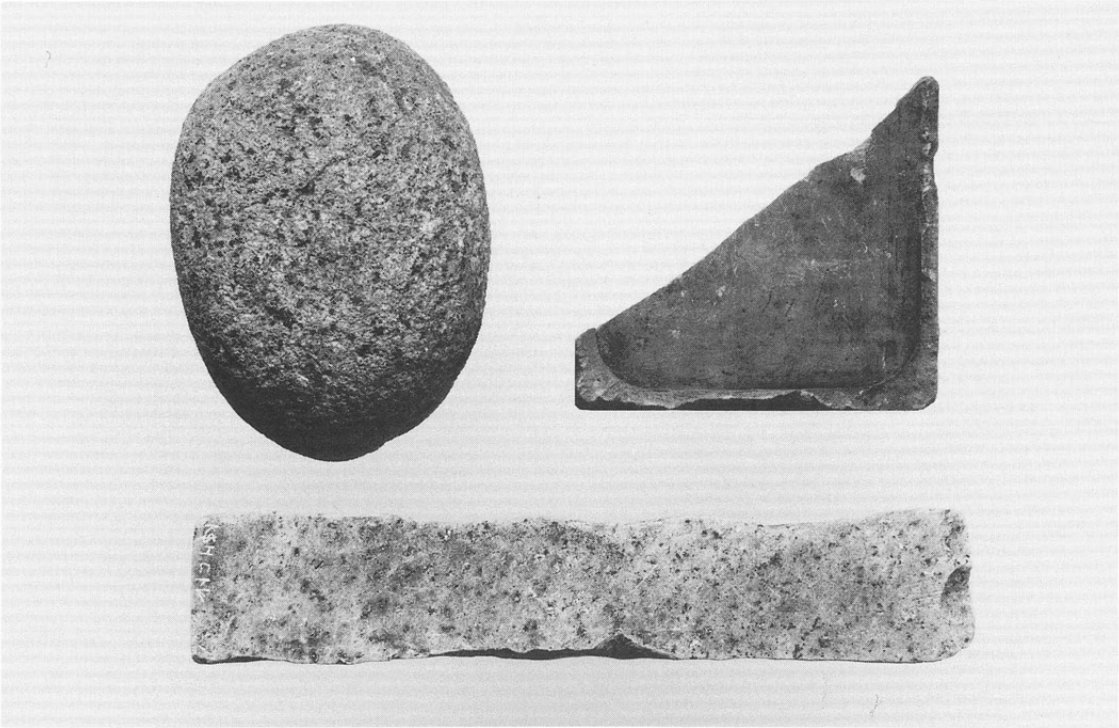
黒色土器



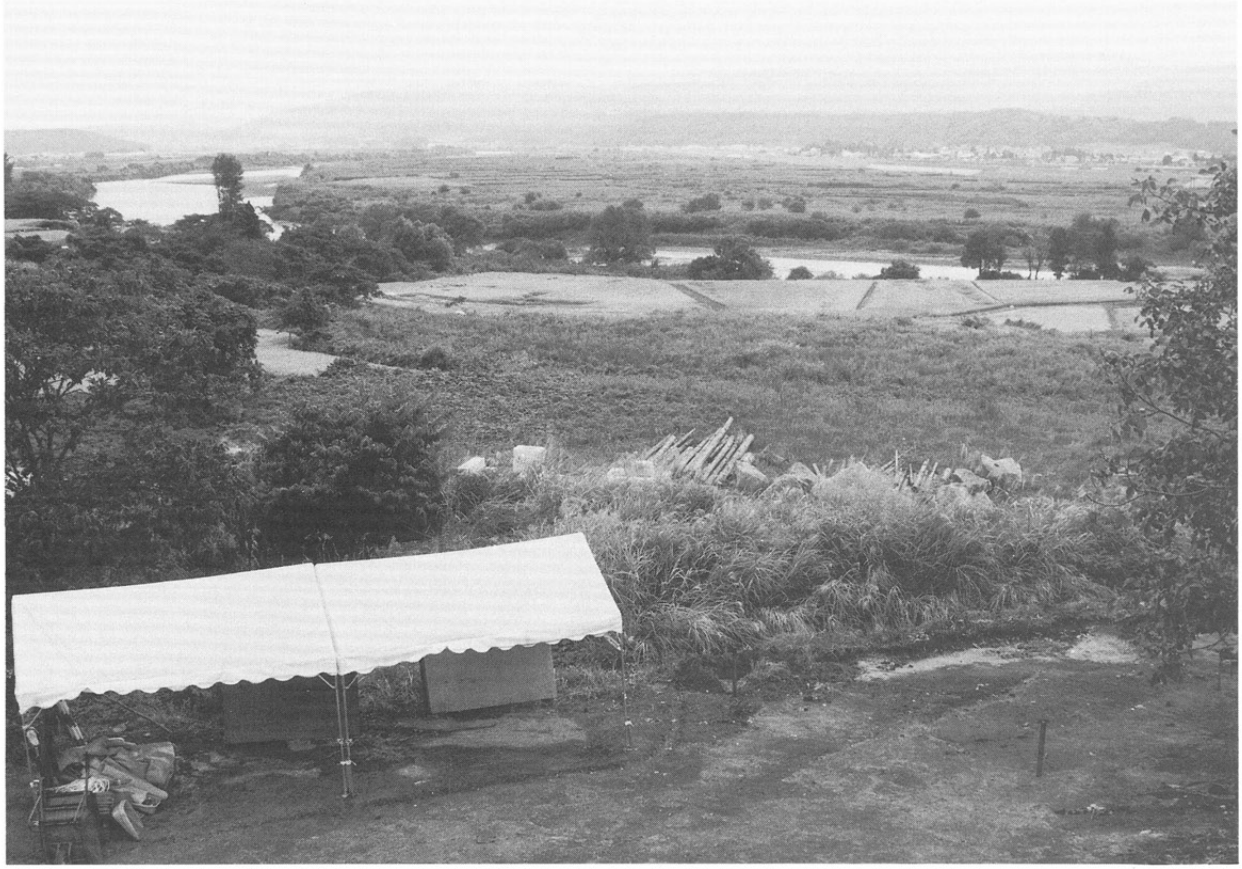
鉄釘　木棺墓出土遺物



木棺墓覆土及び遺構外出土遺物



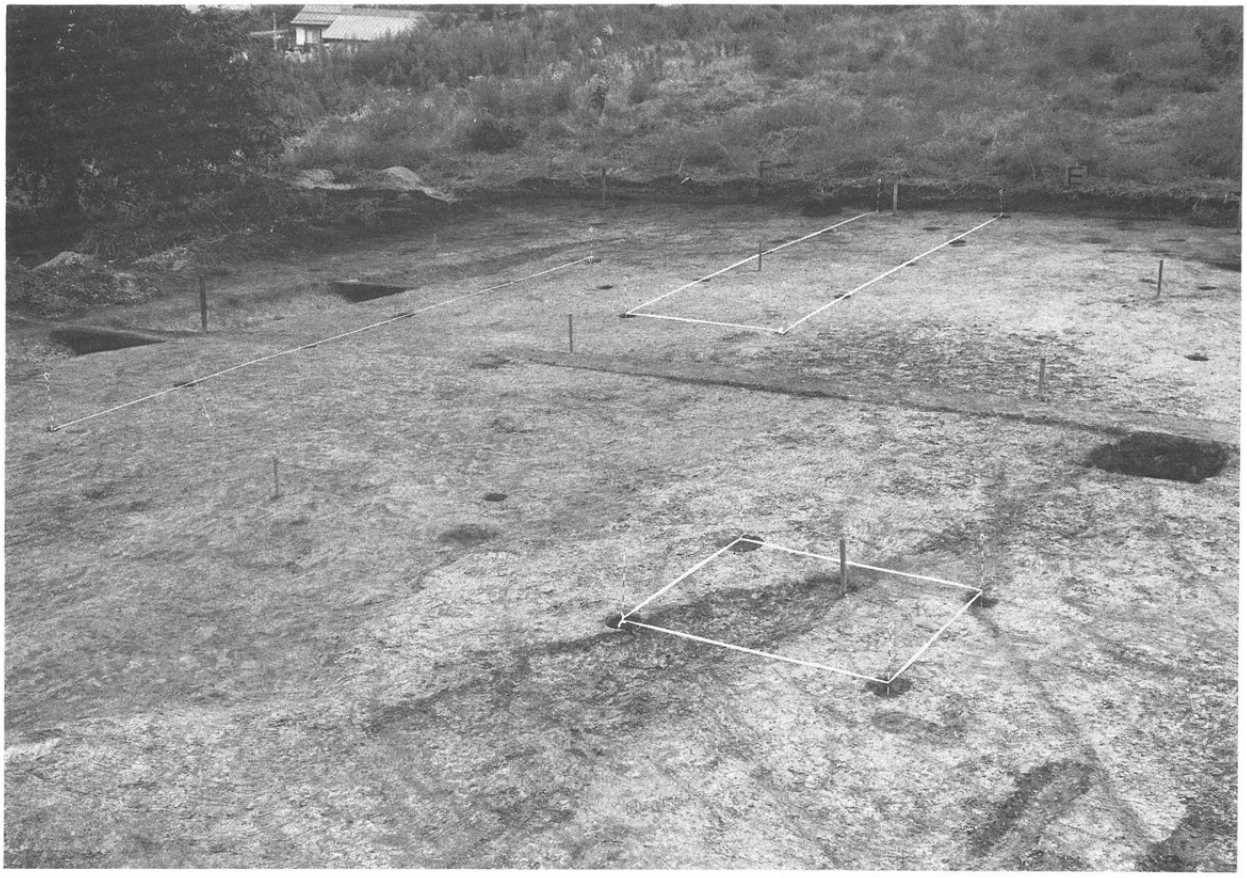
遺構外出土石製品



遺跡より千曲川・常盤平(西)を望む

関沢丘陵全景(南から)、右が旧野沢街道

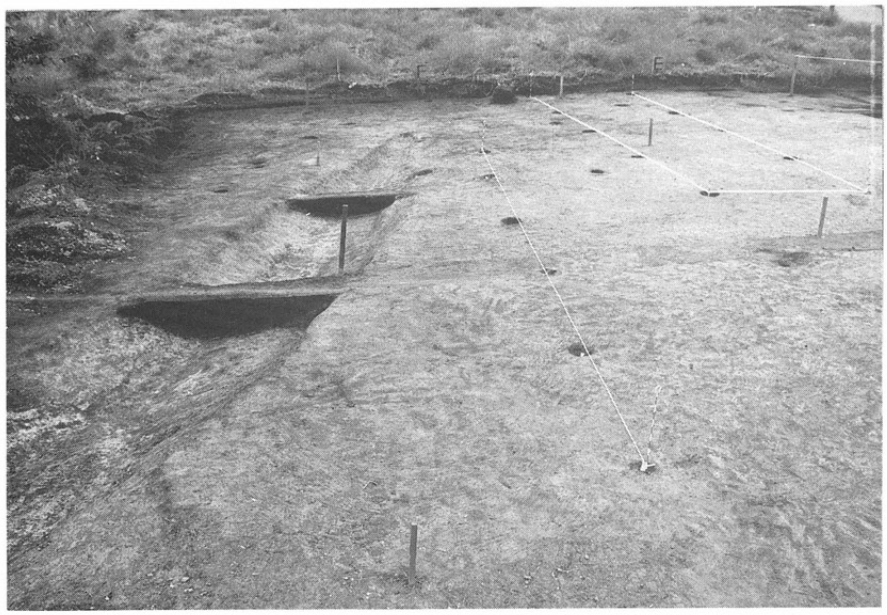
第１トレンチ全景(北から)



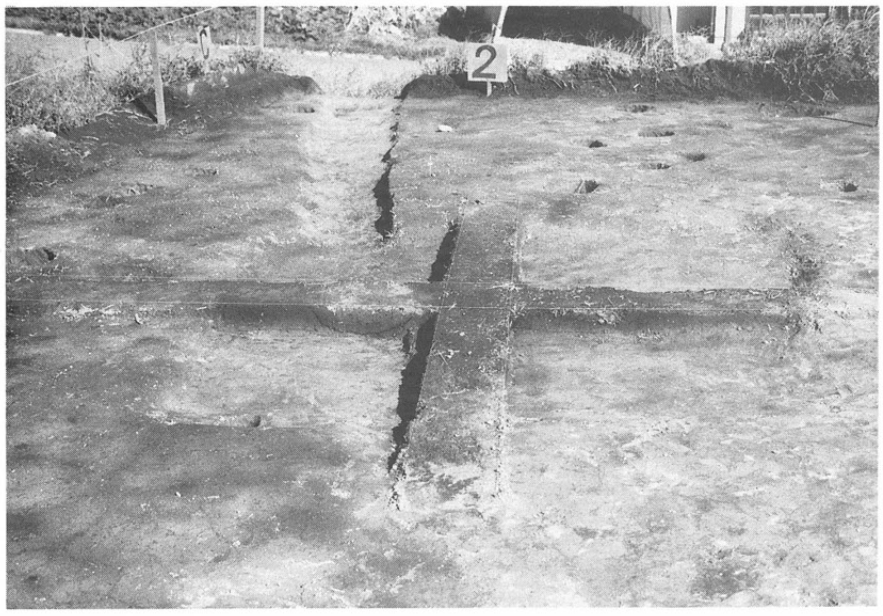
第１トレンチ主要部(東南から)

第１トレンチ調査風景
（東北から）

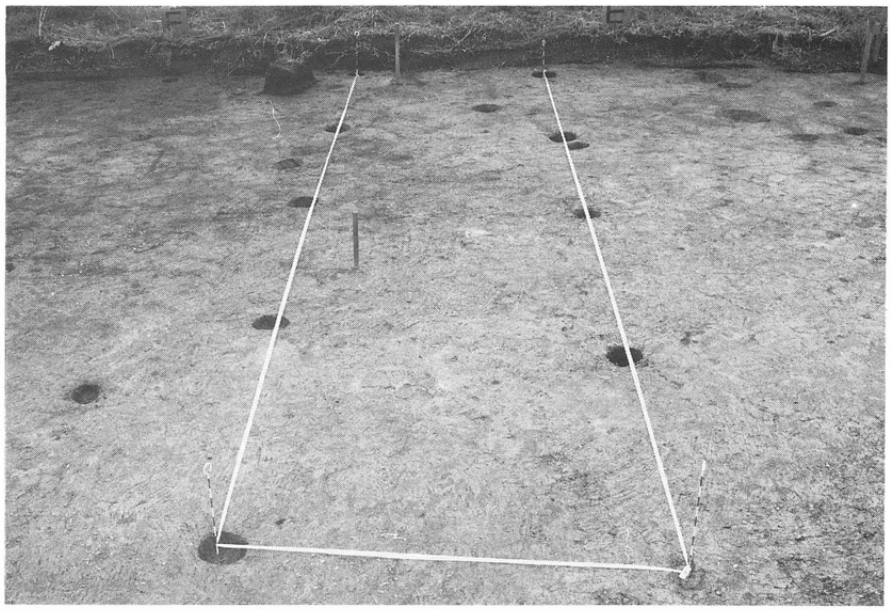
ＳＤ２、ＳＡ１、ＳＢ１
（南から）



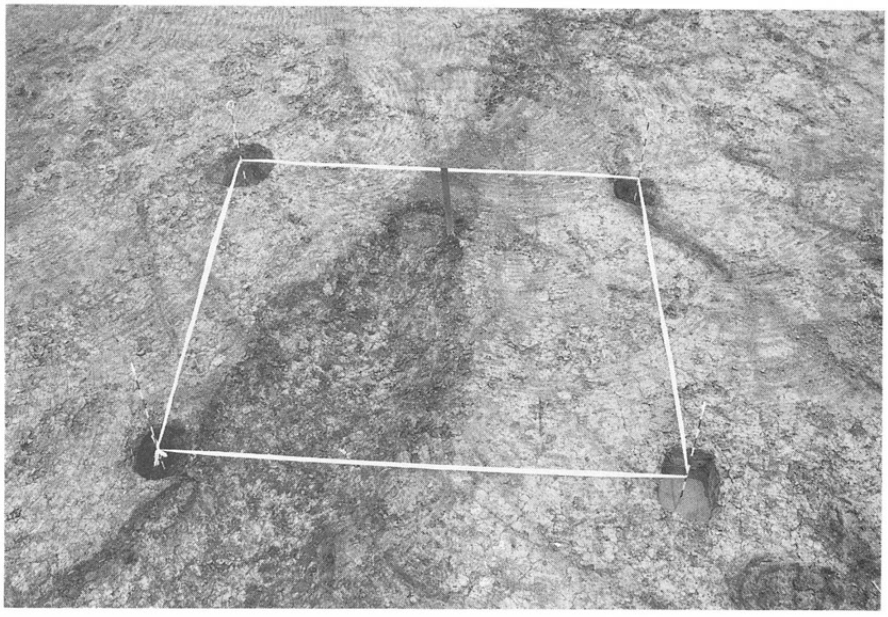
ＳＤ２とＳＫ１の切り合い
関係（西から）



ＳＫ２（北から）



ＳＢ１（南から）

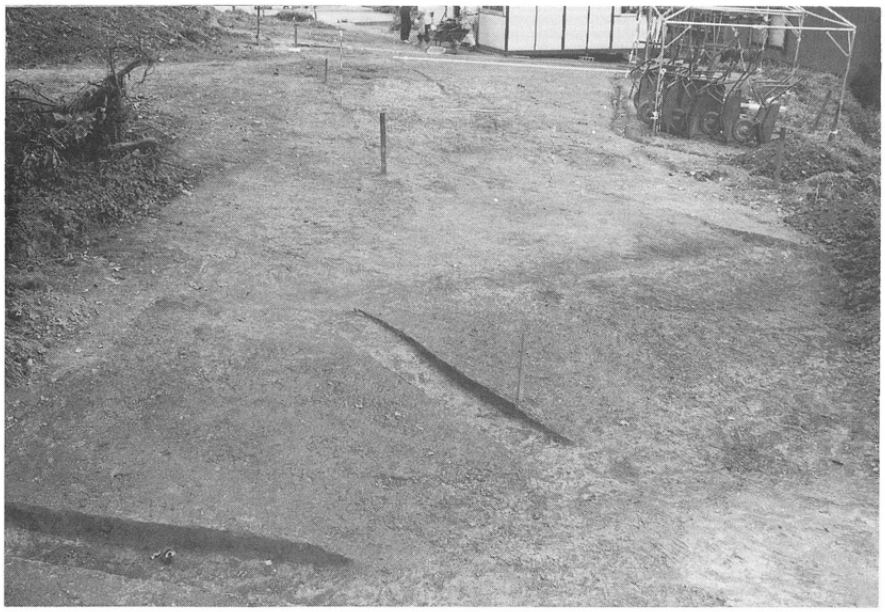


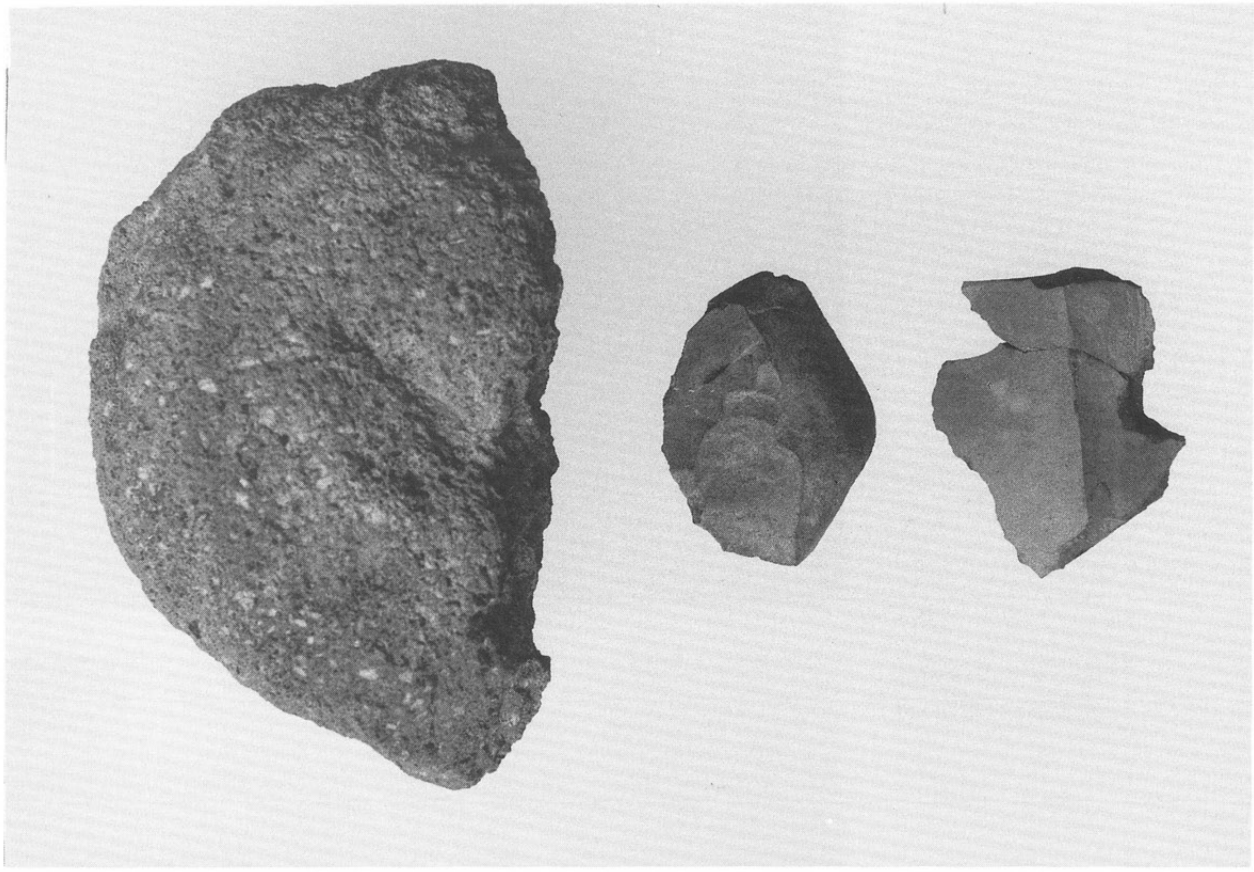
ＳＢ２（南から）

第２トレンチ西部
（南から）

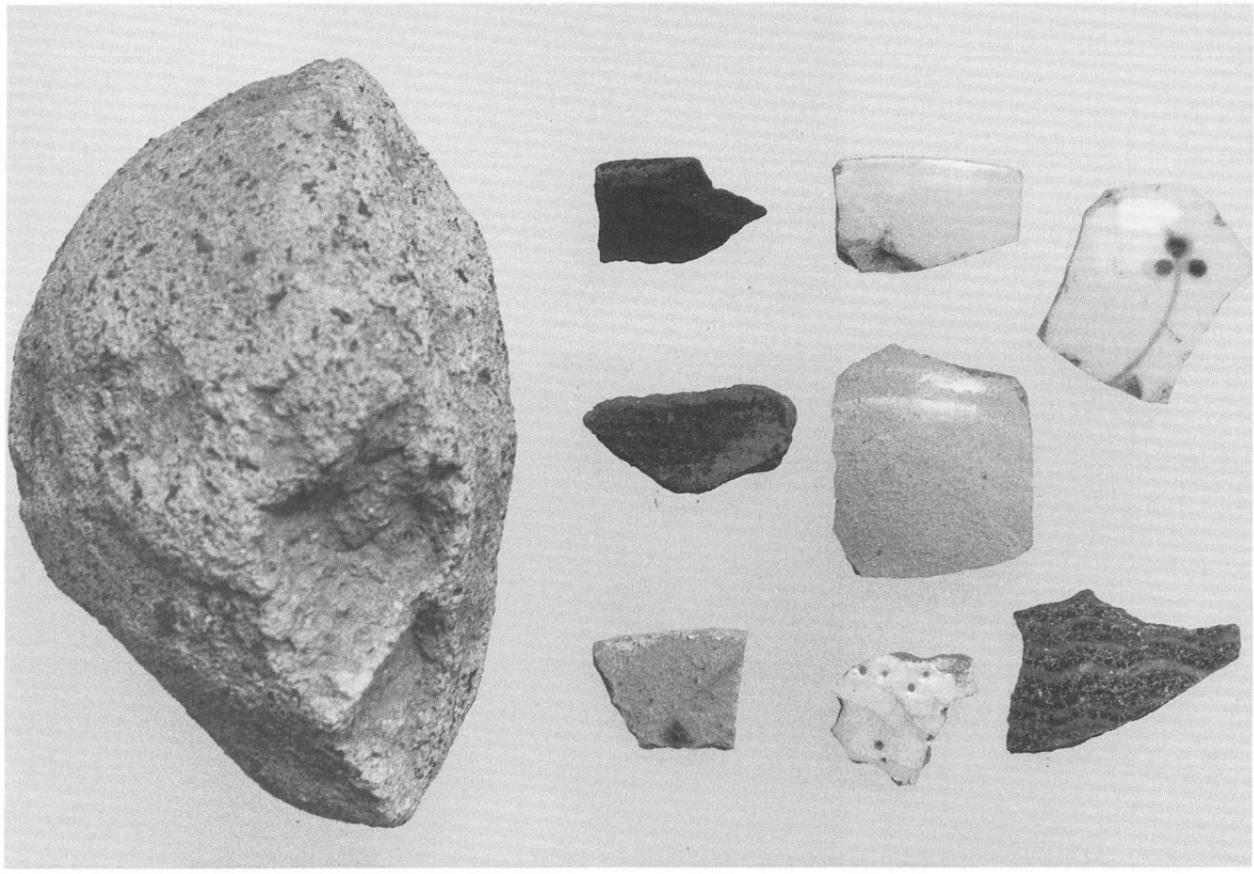
第２トレンチ南部
調査風景（東から）

第２トレンチ南部
（西から）





出土遺物　旧石器剥片・くぼみ石



出土遺物　礫・弥生土器・陶磁器

飯山市埋蔵文化財調査報告　第25集

小佐原遺跡・関沢遺跡

平成３年６月20日発行

編集・発行　長野県飯山市教育委員会
長野県飯山市大字飯山1,110-1

印　刷　㈲ 足立印刷所